

第二二節 戦後の旧三村行政

一、終戦から三村合併まで

1、終戦と三村の変貌

太平洋戦争開戦以来、わが方の不利の情報知らされず、徹底的な抗戦にかり立てられてきた第二次世界大戦は、昭和二〇年八月の広島・長崎両市への原子力爆弾の投下、続く八月一五日の天皇放送で悲劇的な終りを告げた。その前日の八月一四日、「一億国民総力を尽して敢斗せるも戦局好転せず聖断己に下る。県民諸子荒怠相誡めて時局の拾収に努め、食糧増産と物資の生産に精励し、生活の安定と国運の興隆に寄与されん事を」という持永義夫兵庫県知事の告諭が発せられた。

各町村では急きよ部落会長会を開いて、この告諭が伝えられた。天皇の録音放送を明日に控え、席上暗然として声もなかったといわれている。若い者を総て国のために献げ、老人ばかりとなった当時の部落総代の人々の面影が忍ばれる。

しかし善良で勤勉な山村の老人と主婦と幼小の子供達は、大都市で伝えられるような虚脱感におそわれる暇もなく、ひたすら外地や戦線で終戦を迎えた肉身の無事の引揚げを祈念しつつそれぞれの仕事に励んだ。ただ、どこにもやり場のない憤懣と不安と悲哀が誰の胸にもあったことは事実であった。そしてこの終戦後

から九月までのわずか半月のわが国の主な出来事を辿ってみても、当時未だ山村にまで周知されなかった、如何に大きな「世直し」と変革がわが国に起ったかが知られた。すなわち、一五日の鈴木内閣の総辞職に代つて八月十七日東久邇内閣成立、勤労学徒引揚げ解散、燈火管制と信書検閲解除、国民義勇隊解散、軍人の愛宕山集団自殺、右翼の島根県庁焼打、大東亜省、軍需省、農商省廃止、軍保有物資放出、臨時軍事費撤布、御料林木材一〇〇万石放出、マッカーサー厚木到着、在郷軍人・興亜会・文学報国会等の解散がそれであった。また政府は臨時軍事費と日銀券を八月中二八五億円から四二三億円に増加、物資不足の中で早くも猛烈な戦後インフレが準備された。

強力な言論統制の下で、戦争に協力してきた農山村では、多くの学徒動員、軍需工場等へ動員され、国民義勇隊として徴用された人々は終戦と共に村に帰ってきたが、国策に従つて満州に移住していった開拓団は、次にのべるように終戦と同時に悲劇的な自決に追い込まれ三〇〇名近い尊い人命を失つたし、親を子を夫や兄弟を戦場に失つた「英霊」は再び帰つてこなかった。戦線で傷き、南方や大陸に動員された人達も、すぐには帰つてこなかった。村民は敗戦よりも、これら還らざる人々の身の上を案じ、日々不安な日を送つていたといえる。

また戦後の食糧不足に対処するための供出の強化、戦後インフレによる物価高は、全国の農村に押しよせ、埼玉県折原村や長野県塩尻村では早くも村政改革、農業会改組、民主的農民組合の組織化がみられ、地主制の革新、農地改革も要求されるようになってきた。

2、戦後町教育の出発

ひたすら「国のために」と念じて推し進められてきたこの地域の教育が、敗戦によって受けた打撃は多かつた。何を依りどころとし、何を目ざして生きればよいのか、どのように、どのような教育を推し進めていけばよいのか、はりつめていたものすべてが空しいものになった虚脱感と困惑で、教師たちを途方にくれさせたのは当然であつた。

しかし、そういうなかで「緊急対策職員会開催（八月一七日）」というような記録や、「薪炭生産ヲ中心トスル戦後経営研究会開催（九月二七日）」というような記録が、久畑校の沿革誌にも見られるとおり、教育再建の道を模索し、一日も早く、教育の依りどころと指標をつかもうとする時代がしばらく続いた。その間にも「聯合軍進駐部隊学校保管、武器接收、柔剣道ノ破壊状況取調ベノタメニ来校」（昭和二〇・一一・一）「御真影奉還ノタメ豪雪ノ中、城崎郡五荘国民学校ニ赴キ奉還ヲ完了ス」（昭和二一・二・四）「進駐軍ノ指令ニヨリ、軍国主義的、国家主義的思想ヲ盛ルトミナサル教科書類、図書類、掛図類全部ヲ豊岡小学校ニ搬入ス」（二一・二・二八）「奉安殿撤去」等、無条件降伏の実感を切実にするようなことが、次々に行われた。このような中で、食糧増産のために掘りおこされ、畠になっていた運動場を地均して運動場に戻したり、校下の各地区を訪問して「教育再建の途」を語りあつたりなど、戦後教育の地固めをしてきたのである。こうして、昭和二十一年一月三日新憲法が公布され、昭和二十二年三月三十一日「教育基本法」「学校教育法」等が公布され、「国民学校令」が廃止され、四月一日から、いわゆる「六・三制」が発足し、漸く新教育の方向と進め方がはっきりしたものになってきたのである。

これによって「国民学校」は「小学校」と改称され、「高等科」を廃止、「六・三制」による「中学校」

が発足した。高橋地区では久畑小学校校舎の一部を「高橋中学校」の校舎として発足するが、後、平田小学校に高橋中学校の分校をおき、平田校区の一・二年のみを指導することとし、昭和二八年四月、出石高等学校高橋定時制分校が平田に設置されたため、中学校分校は本校に合併された。合橋地区では、合橋小学校の北の一棟を合橋中学校の教室にあて、相田小学校に中学校分校をおいて「合橋中学校」が発足したが、昭和二八年独立校舎の落成によって「相田分校」は廃止された。資母地区では、資母小学校校舎の一部を教室として「資母中学校」が発足、昭和三十一年七月独立校舎落成と共に新校舎に移っている。

なお、豊岡高等学校定時制資母分校は、高橋分校より前、昭和三十一年一月に資母小学校校舎の一部を教室として開校、資母中学校長の管理により発足している。（のち四一年出石高校定時制高橋分校に統合され、豊岡―資母分校廃校）

さて、六・三制の発足と共に、兵庫県軍政部クララ・エル・スプーナー女史が、各学校を来訪、新教育発足の状況を視察している。（昭和二二・五）また、この年から翌昭和二十三年にかけて、各学校とも、毎週月・水・金の三日、午後二時より四時まで、新教育の運営と研究のための新教育研究協議会を行っているし、育友会を結成発足もさせている。このようにして、この昭和二十二年という年が、敗戦の虚脱と困惑、混乱を払いついて、新教育の方向を明かにし、体制を固めようとする年になったようである。

しかし、民主教育の推進にとっては大きな役割りと意義をもつ「教育委員」の選挙が行われたのは、翌二十三年一〇月五日で、当選した教育委員によって教育委員会が組織され、地域の実態に即し、地域住民の期待に応える教育が推進されることになったのである。

二、敗戦と大兵庫開拓団の悲劇

1、敗戦・終戦の背景

前述の大兵庫開拓団が現地に到着した昭和一九年三月とは、どんな年であつたか。わが国が大平洋戦争に突入したのは一六年一月八日であつたが、一七年四月には米軍機が初めて東京に來襲、六月にはミッドウエー海戦、八月には米軍がガダルカナル島に上陸、一八年五月にはアッツ島のわが守備隊が玉碎する等、南大平洋に布陣されたわが国の重要拠点は、圧倒的な米空軍と、科学的兵器の近代利用によって次々と占取されていった。わが国の世界に誇つた無敵海軍も次々とその機能を失ひ、本土空襲は時間の問題となつてきた頃であつた。大都市の防空演習は強化され、配給物資は一層窮乏となり、一八年末から都市疎開が始まつた。前述のように京阪神の小学校ははるばる但東町まで学童を疎開せしめる状況にあつたのである。

しかし大本営は戦争の実状と、戦時経済の実態を知らさず、専ら国家主義と精神的な戦斗気力の醸成にその精力の大部分を費していた。そして唯一の戦力は膨大兵士の消耗に対する国民兵力の徹底的な動員であつた。

2、大兵庫開拓団の悲劇

高橋村を中心とする大兵庫開拓団は一九年四月現地に到着し種馬鈴しよの送付等、母村と連絡をとりながら一家を挙げて困難な開拓に従事した。そして厳しい冬と斗い昭和二〇年の春を迎えたが、僅か一年余を経た二〇年八月九日、日本軍利あらずとしてソ連が参戦し、開拓よりも北方警備に力を入れなければならぬ事態となつた。以下この開拓団の年譜によつて悲劇の終末の推移を見れば次のようである。

二〇年八月九日 ソ連参戦、警備充実を図る。

二〇年八月一四日 戦局急迫のため、県公署の命により団地より脱出を図る。

二〇年八月一五日 蘭西県公署にて終戦を知りハルピン市に脱出すべく夜八時同地出発、団長、副団長同

日江上軍に軟禁さる。

二〇年八月一六日 土匪（現地満人部隊）の襲撃を受け、食なく全員終日逃避に全力を尽す。

八月一七日 土匪の襲撃ますます激しく、万策つきホラン河に入水実により二九八名が集団自決す。

八月一八日 入水後死に切れず救助された者八六名、蘭西県公署に軟禁。

九月三日 生存者は現地復員一七名と合流し、ハルピン市に送られる。

九月五日 生存残存老幼婦女子六〇名ハルピン難民収容所にはいり、男子四三名は牡丹江に送られる

途中一名死亡。

一〇月一三日 男子四二名牡丹江よりハルピン市難民収容所収容。

昭和二年一月二四日 収容所内で団長病死

八月二二日 内地送還の発表を聞く。

一〇月六日 コロ島出港。

一〇月一三日 一一九名引揚げ帰村

というのがその経過である。（前掲資料）

この恐るべき悲劇の記録の詳細は前述但東町教育委員会の「国策に散った開拓団の夢」にのせられている。

当時の体験者の手記、又は口述として残されている、それらの主なものを挙げてみれば次のようである。

(1) ソ連参戦と入植地引揚げ交渉

ソ連参戦後の開拓団は入植地を引揚げのうわさがあり、終戦の前日団長は朝早く団員を一カ所へ集合させ、「全員県庁に籠城することになるかも知れない。多分ソ連軍が進入してくるだろう。馬車一〇〇台位送るよう計らう」と蘭西県公署から開拓団本部へ電話してきた。開拓団員は馬を部落民に与へ貯蔵の大豆七、八石を安く売り脱出を留意した。しかし蘭西には開拓団員の多くはいなかった。それは一時五〇〇人ばかり蘭西病院に収容されていたためであったが、まもなく城外に出よといわれ団員達は一五日の夜は蘭西城を出て一晩中歩き廻った。そのうち朝鮮人が扇動し、開拓団役員は人民裁判にかけられたが死刑を免れ、三日間刑務所へ収監された。(倉橋副団長手記)

(2) 自決入水の記録

私達は必要品だけを手にし一晩歩き続けて県庁(満州蘭西県)に着いた。団長副団長らは江上軍に捕えられたらしい。仕方なく皆で歩くことになった。一步でも日本に近ずきたかった。長柄の草刈鎌をかざして現地人が襲ってくる。小銃の音もする。夜こそ歩くことが安全なので皆で夜中歩いた。青壮年は全部現地召集され、ワーワーと匪賊の襲う声を聞き乍ら病人、老人、子供、身重な妊婦、乳児などを皆でとり囲むようにして守り、まる二日飲まず喰わずで満州の広野を歩いた。一七日の未明満州部落につき、水と高粱の握り飯を一つ宛与えられた。しかし疲労はその極に達し「こんな半殺しの目に遭うより自分達で死にたい、潔よく自決しよう」こんな意思が暗黙の中に皆の胸に成立していった。

一〇時頃入水自殺することが決つた。この年は雨が多く豪雨でホラン河畔が増水し田畑に水があふれていた。そこが自決の場所と決められた。水底には粟や麦の穂の沈んでいるのが見えた。身体を縛り合つて入水することになった。「子供の死を見届けてから入水せよ」との命令がでた。水際で子供達は「死ぬのはいやだいやだ」と泣き乍ら逃げ廻っていた。それらの子供の首をしめて入水した。苦しきのため一生懸命水にもがき上ろうとする。それを押へて水中に入れた。(石田多美枝手記)

「わが手で絞めた弟妹の首」松本佐紀子「ひたすら死にたかつた」後けい、「白眼をむいた兄の溺死体」山下幸雄。悲壮な手記と口述が「国策に散つた開拓団の夢」に残されている。河は立てば胸まで位の深さでしかなかつたため助かつた人、氣絶後引揚げられ助かつた人もあつた。また一年生の妹の首を絞め、仰むいたまま死んで流れていった妹と「殺さんといて！」と叫ぶ弟を三度び川の中へ突放し、傍の人に首を絞めて貰つて死んだが水中で生き返つて助けられた人もあつた。それらの人の手記は、当時の悲惨な真実を後世に伝えてゐる。

「水の中は二九八人の死骸で一杯になつていた。そのうち満人の死人の追剥ぎが始まつた。(死人の衣を剥いで持歸つた)生き残つた六人は、三班に分れ脱出したが飢と恐怖で同行の音松医師が何度も死のう死のうと注射針を腕に刺そうとした。しかしやつとそれを拒絶し続けて生きのび県公署に辿りついた」

生存者の手記も生きて逃れてきたことの苦しみをこのように綴っている。

集団自決のあと駆け付けた中易団長が「残念だ三〇分遅かつた。息を吹き返しそうな者がいたら皆引揚げてくれ」と大声で叫んだという石田多美枝手記も、済んだことは仕方がないと云えない重要な意味をもつ手

記といえる。

このような悲劇は、二度と歴史の上に繰り返してはならない。要するにこの分村開拓の悲劇は一つにはこれらの開拓計画が現地、満人の土地を奪って「僅かの金で熟地を取上げ満人を追出した」（春木一夫「遥かなり墓標」）いわば軍事移民であったこと、「ただ国家の為に命を棄てよ」と教えられ、個人の尊厳と主体性を無視した教育によって自決に追い込んだ所に悲劇の根源があり、これらの歴史を通して改めて民主主義と民主憲法の趣旨を再認識する必要がある。みんなの納得に基く民主的な政策と政治があればこれらの悲劇はこんな形で起らなかったといえよう。

三、戦病死者と遺族会

戦前における戦没者に対する慰霊行事は、軍事思想の普及と兵事行政の立場から盛大に行われ、各市町村

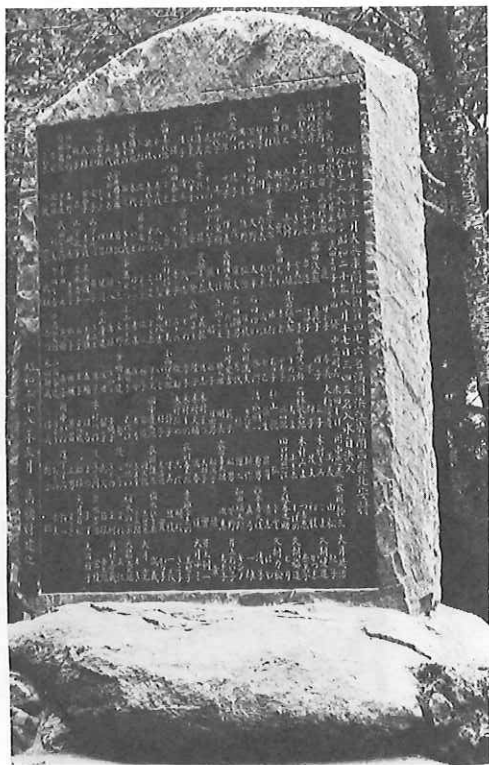


写真 345名の殉難者名碑 久畑一宮神社境内

の葬儀は「公葬」とし、村長在郷軍人会長の花輪や弔辞を贈ることとなっていた。

しかし終戦後は軍国主義思想復活のおそれありとして「公葬」は停止された。したがって資母地区では昭和二年七月二日小西梅太郎外一三名の合同慰霊祭が行われたのを最後に、公葬は廃止された。しかしその後も復員中途の戦病死者や、行方不明者の戦病死公報も出され、宅葬が行われるので、公人としてでなく、私人として村長も参列焼香し、以後は遺族会会長の名で参列を斡旋し、宅葬に参列することとなった。

遺族に対する援護についても、終戦後は「特別の取扱いをしてはならぬ」こととなり、扶助料も一切停止された。それは敗戦後の最も取扱いの変った点であった。

しかし昭和二七年「戦傷者・戦没者遺族援護法」が制定され、「戦没者の妻に対する特別給与金」は渡辺梅野他二人に、「特別弔慰金」は戸垣八重他二人に、「公務扶助料」は加藤庄太郎他一七七人に支給されるようになった。

資母地区では昭和二二年八月「資母村遺族会」が結成され、初代会長に能勢平八が就任、二八年六月日露役の従軍者で、爾來遺族援護に献身されている佐古弥之助を会長に選任した。また三〇年七月頃より招魂碑の他に今次大太平洋戦争戦没者の石碑建設の議が起り、寄付を集め、昭和三三年一月資母小学校の御真影奉安殿撤去趾に、城山より招魂碑を移転し、副碑として「資母戦没者碑」を建設し後世に残すこととなった。しかしこれらの石碑に刻まれた戦没者の犠牲は極めて大きく、北満の地に散った「大兵庫開拓団殉難碑」と共に、二度とこのような碑を建てるような事態を引起してはならないといえる。その意味でも後世に伝えるべき石碑といえるであろう。

いま資母地区における戦没者の、戦没場所別、年次別内訳をみれば次表のようである。
 戦没場所別戦没者数

支那（中国）	三四	比島（フィリッピン）	四二	ペリユー島	三
満州	七	南洋群島、大宮島	二	ニューギニア島	八
南鮮（韓国）	一	マリアナ群島	三	国内	一〇
ソ連	七	バラオ島	三	復員後死亡	三
東太平洋	三	スマトラ島	二	不明	一
西太平洋	二	レイテ島	一	計	一九〇
南太平洋	一	ギルバート島	一		
北太平洋	五	ニューブリテン島	五	満州開拓団	
南方海上	三	ボルネオ島	七	満州浜口省蘭西県 北安村に於て自決	四
本邦周辺海上	一	トラツク島	一		
沖縄	八	ブーゲンビル島	六		
仏印	二	ミンダナオ島	二		
ビルマ	一六	ネグロス島	一		

年次別戦没者数

明治二八年	一	昭和一五年	三	昭和二二年	一
三七年	一	一六年	四	二三三年	二
三八年	四	一七年	九	不明	一
昭和八年	一	一八年	八	計	一九〇
一二年	二	一九年	四三		
一三年	四	二〇年	九三	満州開拓団	
一四年	五	二二年	九	昭和二二年	四

以下、合橋・高橋・資母の順に戦没者をかかげる。これら英霊に対し旧村毎に遺族会が毎年五月忠魂碑前にて慰霊祭を行い、町もまた順次町主催で司祭し敬弔の誠をささげている。

合橋 一五三名
 高橋 一四〇名
 資母 一九〇名 (他開拓団四名)
 合計 四八三名



写真

合橋戦歿者忠魂碑

(明治39年建立)

碑執筆は元帥山県有朋

碑字寄贈は堀田強。

もと赤坂に建立したも

のを戦後現地に移転し

副碑も建てた。

(合橋小学校庭)

写真

高橋戦歿者忠魂碑

(大正14年建立)

碑執筆は元帥 川村

景明。

(一宮神社境内)



写真

資母戦歿者招魂之碑

(明治39年建立)

碑執筆は当時の書道家。

もと城山に建立したも

のを戦後、現地に移転

し副碑も建てた。

(資母小学校庭)

合橋戦没者

畑

七名

【注】

法名欄空白は町外転出その他の事情で記入できなかったことをおわびいたします

叙勲	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時ノ年令
勲八	大谷文太郎	母	英忍義徹居士	明治三八年八月四日 満洲陸軍病院戦病死	二八
伍長	井上藤市	母	馨昭院盡忠英俊居士	昭和十三年九月二十七日 河北省小羅山戦死	二二
伍長	橋本国雄	父	薰昭院志国武鑑居士	昭和十三年一月一日 河北省喻家湾	二二
勲八	東義郭	弟	郁昭院殉忠義郭居士	昭和十五年九月二十八日 大阪陸軍療養所戦病死	二五
勲八	田村勝郎	父	穂昭院忠道勝賢居士	昭和十八年一月二十五日 ギルバード諸島	三一
上等兵	中田新一郎	父	稗昭院真忠順道居士	昭和十九年七月一日 岩国陸軍病院病死	二五
上等兵	深垣幸太郎	父	菱昭院忠誠孝蓮居士	昭和十九年一月二十五日 比島方面	二五

水石

一二名

叙勲	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時ノ年令
伍長	山本伊佐夫	弟	即生院釈信暁居士	昭和二〇年七月十七日 比島レイテ島ピリヤバ	二五
伍長	岸本久一	妻	顕忠院釈久歎居士	昭和二〇年四月二十九日 比島ルソン島	三一
伍長	岸本春次	兄	即生院釈春暁居士	昭和二〇年七月二〇日 比島ブゲンビルラツア	二八
上等兵	山本庫一	弟	積忠院釈秀芳居士	昭和二〇年二月二十八日 比島より復員死亡	三〇
中尉	井上員雄	妻	韞昭院忠厚英範大居士	昭和十九年六月一日 於本洲南方海面	三九
伍長	福田駒治	父	淳昭院忠篤義観居士	昭和十九年六月 比島マニラ北方	三三

矢根

二二名

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
旭八	一等卒	大石藤治郎	甥 藤祐	英岳義勇居士	明治三八年 九月一七日 満州馬石保	
旭八	一等卒	大石万治	姪 静枝	靈山義光居士	明治三八年 八月二三日 満州	
旭八	上等兵	大石善一	妻 恒	芳昭院義烈散居士	昭和二年 九月二四日 河北省入合庄	三〇
旭六	上等兵曹	家城英義	兄 源太郎	至誠院英俊義忠居士	昭和一九年 三月一六日 ソロモン群島沖	
勲七	一等兵曹	川原春藏	妹 とめ	彰忠院春洋日義居士	昭和一九年 五月一五日 インド洋	二五
勲八	伍長	家城光夫	妻 こと	宜武院義應紹光居士	昭和二〇年 六月五日 比島ミノダナオ島方面	三二
勲七	兵曹長	永井勝夫	父 綱太郎	法城院釈勝淳居士	昭和二〇年 七月二日 比島ザンボアンカ	二六
勲八	伍長	川原政治	妹 とめ	功岳院義達日政居士	昭和二〇年 六月二三日 ビルマ方面	二八
旭八	伍長	大石幸正	母 りん	義正院勇岳紹幸居士	昭和二〇年 六月 ビルマベグー山系	二五
勲八	上等兵	森井太一郎	妹 のぶ系	顕昭院忠道茂芳居士	昭和二〇年 一月二三日 ビルマヨーゴン	二二

勲八	伍長	岡本光好	父 松造	英道光賢居士	昭和一八年 四月二二日	二八
勲八	伍長	橋本静雄	父 条造	轟昭院義厚静雄居士	昭和一九年 八月二六日 ブウゲンビル島	二六
勲八	伍長	山口美喜蔵	兄 忠四郎	隨昭院忠岳義貞居士	昭和一六年 八月六日 北安省北安県満鉄病院	二一
勲八	伍長	谷垣貞二郎	弟 繁治郎	從昭院兼忠義順居士	昭和二〇年 七月一九日 昭和二〇年 六月二〇日 ビルマトング島	二三
勲八	伍長	中田兼治郎	弟 繁治郎	從昭院兼忠義順居士	昭和二〇年 七月一九日 昭和二〇年 六月二〇日 ビルマトング島	二三

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
勲八	兵一等兵	浅貝藤太郎	母	禪昭院水漬忠了居士	昭和二〇年三月八日 有馬郡三輪町傷疾軍人兵庫療養所	二二
勲八	兵一等兵	浅貝槌雄	母		昭和一九年一月三十一日 南方洋上	二三
兵長	兵長	野世勇	妻		昭和二〇年一月六日 南支那海	二三
兵長	兵長	浅貝義一	母	伝宏院義堂紹一居士	昭和一九年二月二三日 ボ1ゲンビル島リノボボ	二二
兵長	兵長	久後久一	母	俊光院義応紹久居士	昭和一九年二月十九日 南方方面	二二

奥矢根

九名

勲五	陸軍少佐	大石範次	妻	至誠院忠巖宗範居士	昭和二〇年六月二十九日 比島ルソン島リザ1ル州	四三
勲八	一等兵	戸田郡助	妻		昭和一九年一月八日 パ1ジー海峡ルソン島北端	三四
勲八	上等兵	福富謙一	妻	至誠院謙道守一居士	昭和二〇年四月三〇日 北支花南	三四
勲七	軍曹	大石儀	弟	盡昭院忠績義顕居士	昭和一九年一月二七日 ニューブリテン島ツルブ	二四
勲八	上等兵	川原重吉	妹	善行院正道院日重居士	昭和一九年一月二二日 パラオ島	四〇
勲八	上等兵	小牧春造	妻	忠直院堂義晶居士	昭和二〇年二月二六日 マニラ	三七
勲七	上等兵	黒森成一	母	黒森成一命 霊	昭和一九年八月 北支	二五
勲八	二等兵曹	大石保	甥	建功院大義忠保居士	昭和一九年一月二五日 比島方面	二三
勲六	曹長	坂岡力蒔	母	晃昭院忠覚義透居士	昭和一九年八月一九日 パ1ジー海峡	三一
勲八	上等水兵	衣川源之助	妻	信證院釈源泉居士	昭和二〇年四月二四日 ルソン島クラ1ク	三七
勲八	兵長	衣川春一	弟	忠義院釈春了居士	昭和二一年二月二日 満州吉林省敦化	三二

勲八	勲七	勲八
軍兵	伍長	伍長
属長	長	長
森	森	松本
定雄	茂美	重信
兄	妹	弟
禎治郎	節子	武士
顕光院	宝珠院	大知院
定雄	至誠宗	義道宗
日正居士	幹居士	信居士
昭和一九一七年二月二日	昭和二十年七月二十六日	昭和二十年六月二十八日
ニユ一ギニヤバサボア	シベリヤ	ルソン島ビノン
二七	二五	二六

出合市場 七名

叙勲	旭八	旭八	旭八	旭八	旭八	旭八	旭八	旭八
階級	伍長	曹長	二等兵曹	軍属	上等兵	上等兵	伍長	軍属
氏名	岩出太造	大石貞夫	奥田三郎	奥田三郎	多田章	奥田一男	福富好夫	大石正雄
遺族	長男 太一郎	兄 昌一	兄 登	兄 正夫	兄 正志子	兄 操	兄 銀藏	兄 銀藏
法名	香昭院忠鑑徴入居士	義達院积昭英居士	忠精院积三勇居士	昌忠院积晓了居士	滋眼院积忠士居士	光闡院积義教居士		
戦没年月日及位置	昭和一九一二年一月二七日 河北省蘇州	昭和一九一一年一月四日 パシ一海峡方面	昭和一九一一年一月二五日 比島方面	昭和一九一一年一月二四日 東支那海海上	昭和一九一八年三月三日 ニユ一ギニヤ島クレチン岬附近	昭和一九一八年三月一七日 神戸市妙法寺川附近	昭和一九一八年三月二八日 本邦南方海面	
戦没時ノ年令	二七	二二	二二	一九	三三	二五		

河本 一〇名

叙勲	旭八	旭八
階級	上等兵	曹長
氏名	森井四郎	森井喜義
遺族	兄 正義	妻 まき
法名	勝忠院殉真居士	盡忠院积純孝居士
戦没年月日及位置	昭和一九一三年九月二四日 北支羅比	昭和一九一五年一月三十一日 北支石間
戦没時ノ年令	一九	三一

第十二節 戦後の旧三村行政

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
勲八	伍長	土方栄次郎	父 勇吉	清光院法林義性居士	昭和二十年七月二三日 比島ルソングタンタピン	二三
勲八	上等兵	川戸八郎	父 次郎平	正覚院忠勇明義居士	昭和二十年六月六日 比島ルソング島ヌエパレスカヤ州パレテ	二四
勲八	上等水兵	舟木春二	父 繁太郎	正覚院法林明元居士	昭和二十年一月二日 天津第一五病院	二二
勲七	兵長	滝口正治	父 重造	顕功院眞覚義忠居士	昭和二十年六月一六日 北海道西方海面	一九
旭八	三等兵曹	安達牧夫	父 ぬい	顯光院忠道義牧居士	昭和二十年五月七日 北ホルネオサングカン	二九
伍長	安達佐利	母 かな	昭光院誠法利忠居士	昭和二十三年九月一六日 支那安徽祖養家集	昭和一七年九月三日 ニユーギニヤ方面	二四

西谷

一〇名

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
勲七	伍長	小山弘	妻 たつゑ	清光院忠巖紹弘居士	昭和二十年六月十五日 比島ルソング島	三四
勲八	一等兵	小山孝志	父 広之助	功一級信教小山孝志之霊	昭和二十四年一月九日 自宅	三四
旭八	三等水兵	三宅音治	兄 峯太郎	青雲義報信士	大正一〇年七月十五日 呉軍艦摂津	二一
旭八	伍長	広谷一雄	弟 端一	焯昭院忠節一勇居士	昭和十三年四月二八日 北支壬山	二五
旭八	兵長	松岡保茂	兄 通晴	顕光院忠徹義保居士	昭和二十年六月二日 モロタイ島	二七
伍長	松井喜一	兄 定行	義岳院忠道清徹居士	昭和二十年一月二日 加古郡加古新村八軒家	昭和二十年一月二日 加古郡加古新村八軒家	二三
軍曹	廣瀬幹夫	父 正雄	顯誠武能居士	昭和十九年八月二〇日 呉市	昭和十九年八月二〇日 呉市	二〇

兵曹	滝口隆	父	天徳院義岳隆光居士	昭和二〇年 六月二日	印度洋方面	二一〇
	滝本幸男	父	正等院忠堂幸男居士			

天谷

五名

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
叙勲	一等卒	森脇重吉	母 やゑ	忠山良義居士	明治二八年 四月三〇日 満州金州	ノ戦没時
勲七	二等卒	中川竹次	兄 勇造	義忠院英山禅雄居士	明治三八年一〇月 六日 満州	二二一
勲七	准尉	豚座敏雄	父 清造	誠忠院孝道敏雄居士	昭和二〇年 五月二六日 沖	二二一
勲七	伍長	竹内近治	父 宇造	顕晃院義諦英徹居士	昭和一八年 八月二〇日 満州	二二一
	上等兵	森脇満	妹 美智代	義重院満法忠節居士	昭和一九年 九月二四日 比島沖	二二一

佐々木

一四名

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
叙勲	輪卒	石田豊治郎	兄 通太郎	正念院积良観居士	明治三七年 八月二三日 清国	二二一
勲七	曹長	多根卓之助	甥 尚章	大定院积義範居士	明治三七年 九月三日 清国遼陽	二二五
勲七	准尉	井上良雄	父 仲太郎	大雄院実岳良参居士	昭和一三年 五月六日 北支辛庄	二二七
勲八	上等兵	山本均	母 つた	殉忠院积秀勵居士	昭和一三年一〇月 一日 北支河北省鳴鳳岡	二二三
勲八	上等兵	多根喜一	父 菊造	忠良院积大裕居士	昭和十四年二月 三日 北支河北省安新縣	二二四
勲八	一等兵	赤尾初男	父 幾太郎	芳光院积義信居士	昭和二〇年 一月二八日 鳥取陸軍病院	二二二

第十二節 戦後の旧三村行政

勲八	勲八	勲七	勲八	勲七	勲八	勲八	勲八	叙勲
伍長	兵長	伍長	一等兵	学生	兵長	上等兵	伍長	階級
前田	西川	覚	衣川	牧井	岸下	中城	喜旦	氏名
薫	幸一	操	藤一	哲二	七郎	亀一	二三五	
妻	父	父	父	兄	父	父	妻	遺族
久子	与喜三郎	誠一郎	健次	達久	栄次郎	茂平	しげ子	
昭晃院	宣明院	昭応院	一行院	順誠院	最勝院	至芳院	昭智院	法名
黄屋義正居士	釈誓了居士	操屋義高居士	釈信精居士	釈教哲居士	釈法童居士	釈一誠居士	忠兵義勇居士	
昭和二一年五月一日	昭和二〇年六月三〇日	昭和二〇年三月四日	昭和二〇年三月一日	昭和二〇年五月一日	昭和一九年一月四日	昭和一五年一月四日	昭和一三年一月三日	戦没年月日及位置
満州延吉第二病院	昭和二〇年ニヤアルソウ	台湾東北方支那海上	比島マニラ市東方山岳	豊橋陸軍病院	昭和一九年一月二〇日	昭和一五年一月四日	支那河北省井徑県南洛村	ノ戦没時
三九	二四	二九	二二	二二	三〇	二五	三八	

相田

一三名

勲八	勲八	勲七	勲八	勲八
軍属	軍属	兵長	兵長	上等水兵
西良太	井上武彦	西勇藏	西富志雄	赤尾俊一
妻	母	妻	父	父
ヤスヨ	たけ	ユリ子	滝太郎	常太郎
勲徳院	義徳院		顕徳院	常照院
釈良実居士	釈慈海居士		大透義徹居士	釈貫誠居士
昭和一八年一月二八日	昭和二〇年三月一九日	昭和二二年六月一七日	昭和二〇年四月一〇日	昭和二〇年二月三日
東支那海	黄海方面	ビルマペーグ山系	ソロン島	ファイリピン
四七	二〇		二二	二三

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
勲七	上等兵	沢田治郎造	母とみ	正信院 釈 繁忠居士	明治三八年 九月 三日 清国遼陽附近	二八
勲八	兵曹長	宮嶋治雄	妻聡子	徳樹院 釈 忠成居士	昭和一八年 十一月二五日 ギルバード諸島方面	三六
勲八	兵長	村尾孝一	父与一郎	至徳院 忠 誉大孝居士	昭和一九年 一月 四日 北支戦病死	二八
勲八	兵曹長	宮嶋睦夫	妻満子		昭和一九年 三月 三日 ニユーギニヤ方面	
勲八	兵長	宮嶋重太郎	母ます	威徳院 釈 善念居士	昭和一九年 二月三〇日 ペリリニヤ島	二四
准尉	尉	宮嶋関司	妻一恵		昭和一九年 六月 七日 ニユーギニヤマフィン方面	
伍長	長	宮嶋政人	姉一恵		昭和二一年 二月二日 ニユーギニヤアイトベ沖	
伍長	長	中川亀一	妻なみ		昭和二〇年 一月二七日 比島ルソン島	三四
工長	長	中川幾造	母しま		昭和一八年 一月二五日 ギルバード諸島方面	二九
軍曹		京川利忠	妻菊枝		昭和一八年 九月二五日 フイリツピン	二五

小谷

一八名

勲八	高等官	牧井宗一	父森祐	忠良院 釈 大英居士	昭和一五年 七月 三日 河北省鶏沢県	二八
勲八	兵長	清水基司	父次之助	昭勲院 忠 宗輝居士	昭和一七年 六月 七日 ミッドウエー 巡洋艦 三隅	二三
一等兵	妻つや				昭和二一年 六月 五日 自宅	
上等兵	母はま				昭和一九年 四月 三日 出石町	二七
	父誠				昭和二〇年 一月三〇日 自宅	二二

第十二節 戦後の旧三村行政

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
三原 一名						
叙勲	階級	氏名 <td>遺族</td> <td>法名</td> <td>戦没年月日及位置</td> <td>戦没時 ノ年令</td>	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
	二等卒	森岡時太郎	妻 たき	森岡時太郎大人之靈	明治三十七年八月三〇日 清国遼陽南方クワジャシ ファイ	
南尾 一名						
勲八	上等兵	稲葉 実	父 時太郎	准忠院 釈深励居士	昭和十三年一月三日 中支嶋風岡附近	一二一
	上等兵	関川 清	父 孫左エ門	清光院 釈法水居士	昭和二十年一月二九日 北ボルネオ島	一三三
出合 二名						
勲七	伍長	蔭山 吉信	兄 秀雄	吉祥院 釈芳信居士	昭和二十年七月二十六日 ビルマトングーウエチ東 南	二一八
勲八	兵長	沢田 篤市	妻 あやの		昭和十九年八月一 九日	
勲七	上等兵	宮嶋 善一	母 とり	秀誠院 釈良昌居士	昭和十五年五月三〇日 河北省寧晋県	一二一
勲八	軍曹	坂岡 源一	妻 をそ	妙法大義院 顯忠日源居士	昭和十三年四月二八日 支那江蘇省東庄	二二五
勲八	上等兵	京川 竹次	妻 よしの	昭義院 顕道完功居士	昭和十三年四月二八日 支那江蘇省東庄	二三三
勲八	一等卒	蔭山 藤三郎	母 たけ	釈 義 道	明治三十八年八月二八日 戦病死	二一七
	兵長	中井 嘉清	妻 よし子		昭和十九年九月一四日	

唐川

二二名

勲七	勲八	勲八	勲八	勲八	勲七	勲八	勲七	勲八
副看 監督婦	伍長	伍長	上等兵	伍長	伍長	憲兵	伍長	上等兵
関口 ミエノ	近本 広志	山根 賢三	近本 馨	近本 藤一郎	近本 哲	関口 邦夫	近本 豊	近本 喜美男
母	父	妻	妻	父	父	父	父	妻
れい	藤太 郎	いと	ふさ	藤吉	房太 郎	米藏	鹿信	ふさ
昭暉院 蘭室妙 芳大姉	故近本 廣志北 古霊神		昭惣院 南堂自 居士	昭護院 玄藤了 謹居士	昭光院 哲叟明 彦居士	昭鑑院 護道亮 邦居士	昭徇院 豊潤怡 功居士	昭真院 金加宜 保居士
昭和二〇年 八月一五 日	昭和二〇年 三月二〇 日	昭和二〇年 三月二〇 日	昭和二〇年 八月一四 日	昭和二〇年 三月一三 日	昭和一九年 四月二二 日	昭和二〇年 五月二一 日	昭和一九年 三月二二 日	昭和一九年 三月二二 日
比島ミン ダナオ島 リナブ	比島マニ ラ東方二 キロ高地	比島マニ ラ東方二 キロ高地	比島マニ ラ東方二 キロ高地	比島マニ ラ東方二 キロ高地	比島マニ ラ東方二 キロ高地	比島マニ ラ東方二 キロ高地	比島マニ ラ東方二 キロ高地	比島マニ ラ東方二 キロ高地
四四	二九			二四	二四	二七	二五	三五
								愛媛県南 宇和郡
								清国盛京 省

勲八	勲八	叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
上等兵	一等卒	一等兵	上等兵	山崎善吉	母みよ	善徳院義 岳正忠居 士	明治三十七年 九月三日 清国遼陽	二一八
上等兵	上等兵	上等兵	上等兵	渋谷常造	長男房夫	常光院猛 進良勇居 士	明治三十七年 九月三日 清国遼陽	
上等兵	上等兵	上等兵	上等兵	仲田俊藏	長男巖		明治三十八年 三月九日 清国鳥帽子 形山東方	
上等兵	上等兵	上等兵	上等兵	渋谷滋	妻		昭和十三年 四月一九日 支那山東省 嶧県	
伍長	伍長	伍長	伍長	植田光二	妻	惇光院釈 義敬居士	昭和十三年 九月一日 河北省小站	三二六

第十二節 戦後の旧三村行政

高橋戦没者
正法寺

一〇名

勲八	勲八	勲八	勲七	勲八	勲八	勲八	勲八	勲七	勲八	勲八	勲七	勲八
兵長	伍長	上等水兵	兵長	兵長	軍曹	上等水兵	兵長	兵長	兵長	兵長	上等兵	伍長
細川定夫	判田良雄	稲葉喜代治	太田光雄	間邪三郎	渋谷丈夫	判田謙一	太田正太郎	中田正太郎	太田信雄	稲葉甚一	仲谷耕一	中儀富士雄
妻	父	妻	兄	父	母	父	妻	母	祖母	父	弟	父
みよ	信次郎	あさ	貫一	文造	てい	信次郎	りきゑ	しな	ひろ	喜太郎	清夫	幾藏
細川定夫大人の命	釈良雄居士	忠洪院喜岳宗悦居士	隆道法光信士	忠真院戒定恵三居士		信教院釈謙教居士	修證院明鑑勤正居士	貝忠院釈正隆居士	天階院順忠義信居士	忠正院重法宗甚居士	最浄院釈耕祐居士	萬行院釈要專居士
昭和二〇年一月二五日	昭和二〇年三月九日	昭和二一年一月二日	昭和二〇年四月二四日	昭和二〇年二月八日	昭和二〇年五月一六日	昭和二〇年四月二四日	昭和二〇年七月一日	昭和二〇年四月二四日	昭和二〇年五月三日	昭和一九年七月二四日	昭和一九年七月二四日	昭和一九年六月一日
ハバロフスタ	東京戦災死	ウズリー省ウオロシードフ	比島方面							吉林省公主嶺	中華民国河南省	支那湖北省德安
四四	一一一	三六	一三三	一三三	一六	三七	二七	二四	二三	一九	二二	二五

平田 二三名

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
勲八	上等兵	安井 忠	父 音吉	篤誓院 義彰居士	昭和十三年一月七日 河南省羅山第一野病院ニテ戦病死	二二
勲七	上等兵	桑田 鐵造	父 金治	昭忠院 鐵心惠牛居士	昭和十二年九月二日 河北省東花園ニテ戦死	二七
勲七	上等兵	山下 文雄	父 富造	昭忠院 鐵心惠牛居士	昭和十三年五月六日 姫路陸軍病院ニテ戦病死	二三
勲六	軍曹	水谷 儀一	父 作平	興昭院 義信居士	昭和十三年四月二日 江蘇省江堡ニテ戦死	二八
勲六	軍曹	永棟 喜一	妻 はつ系	英正院 義顯居士	昭和十三年七月三日 山西省聞喜縣高家坂東方ニテ戦死	三九

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
勲八	兵長	数森 常太郎	父 作造	連満院 积常楽居士	昭和二十年九月二日 滿洲ニテ戦死	二〇
勲八	兵長	数森 佳一	母 せつ	善照院 积重誓居士	昭和二十年六月二日 比島ルソン島キヤンガーニテ戦死	二四
勲七	軍属	数森 重男	妻 春江	重誓院 积宏遠居士	昭和二十年五月八日 ナオ島サンボアシフコニテ戦死	五六
勲七	曹長	山田 一之	父 亀一	悟峯院 积一道居士	昭和二十年三月一日 ポーゲビル第三基地点ニテ戦病死	二八
勲七	上海等兵曹	山田 源市	母 すす	源知院 积實門居士	昭和十九年一月二日 比島方面ニテ戦死	二六
勲七	上海等兵曹	山田 甚一	父 光造	弘誓院 积教行	昭和二十年三月二日 南支那海方面ニテ戦死	二五
勲七	上等兵	山田 治郎	長男 忠雄	淨祐院 积朗然	昭和二十一年二月四日 朝戦ニテ戦病死	三六
勲七	伍長	山田 春雄	妻 芳枝	昭忠院 积淳英居士	昭和十三年九月二日 河南省張湾ニテ戦死	二九
勲七	伍長	山田 六郎	兄 三男	顯忠院 积義淳居士	昭和十一年九月二日 河北省人合庄ニテ戦死	二三

第十二節 戦後の旧三村行政

栗尾

一八名

勲八	勲七	勲八	勲八	勲八	勲七	勲七	勲八	勲七	勲八	勲八	勲七	勲七	勲八	勲八	勲七	勲七	勲八	勲八	
一等卒	上等兵	伍長	兵海軍整備	兵長	伍長	伍長	一等兵	上等兵	軍属	一等兵	兵長	機閥兵曹	機閥兵曹	上等兵	機閥兵曹	上等兵	上等兵	上等兵	
坂本信藏	田畑信一	安井正雄	淀治郎	淀義雄	坂井健二郎	桑田正雄	桑田正雄	福田孫太郎	谷勲	坂本五郎	桑井信二	福田秀夫	上坂忠男	桑田義文	坂本一雄	桑井源次	水谷保一		
父	父	父	母	母	父	母	父	父	父	父	父	父	父	父	母	母	父		
太平次	仙吉	栄二	かつ	き	為造	せと	佐助	源吉	順太郎	糸太郎	弥太郎	喜八	與喜太郎	菊治	や	たみ	勇太郎		
信海院釋獨音	浄満院釋義信居士	誠心院正淳居士	至教院良誓居士	徳昭院義晃居士	欣浄院健正居士	昭倫院正道紹信居士	真正居士	白雲院義岳玄英居士	釈功勲	至誠院純悟居士	釈信証	至心院秀果居士	純忠院義真居士	光岩院義峰誓文居士	義烈院誠心居士	昌興院至誠居士	殉報院道徹居士		
奉天英打堡附近ニテ戦死	明治三十八年三月一戦死	昭和三十八年七月五日戦死	昭和三十八年七月五日戦死	昭和三十八年七月五日戦死	昭和三十八年七月五日戦死	昭和三十八年七月五日戦死	昭和三十八年七月五日戦死	昭和三十八年七月五日戦死	昭和三十八年七月五日戦死	昭和三十八年七月五日戦死	昭和三十八年七月五日戦死	昭和三十八年七月五日戦死	昭和三十八年七月五日戦死	昭和三十八年七月五日戦死	昭和三十八年七月五日戦死	昭和三十八年七月五日戦死	昭和三十八年七月五日戦死	昭和三十八年七月五日戦死	昭和三十八年七月五日戦死
	二五	二四	二六	二五	二八	二四	二〇	二六	二五	三〇	二一	一三	二二	二二	二二	二六	二三		

第五章 現代における旧三村の成立

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
勲七	上等兵	西垣順吉	母 ひとさ	大雄院義運提忠居士	昭和二年一〇月四日 山東省德州ニテ戦死	一三
勲八	長	田中武雄	父 重吉	忠恭院 釈 淳信	昭和四年 八月一五日 河北省北京野戦病院ニテ戦病死	二二
勲八	長	平石亀雄	父 菊治	賢忠院義山有節居士	昭和五年 二月六日 鳥取陸軍病院ニテ戦病死	二四
勲八	長	榎本義宣	父 義哲	哲叟義宣和尚大禪師	昭和五年 六月二三日 河北省藁縣ニテ戦死	二八
勲八	陸軍大尉	藤田政江	母 せい	藤田 敬二之霊	昭和八年 五月二七日 昭庚軍人兵庫療養所ニテ戦病死	三二
勲六	陸軍中尉	西垣哲男	父 満衛助	神靈院勇岳元哲居士	昭和一八年二月二五日 ビスマルク群島ベルカン南方戦死	二四
勲八	兵 長	西垣悦男	父 兵右エ門	靈照院心光道悦居士	昭和一九年 一月一六日 昭和一九年 七月一三日 南方戦線ニテ戦死	二四
勲八	上海等水兵	西垣信一	父 勝造	良忠院心岳誠意居士	昭和一九年 六月 五日 呉海軍病院ニテ戦病死	三六
勲八	兵 長	山下和雄	父 清	和光院月心永照居士	昭和一九年 六月 五日 河南省洛陽ニテ戦死	三〇
勲七	海軍飛行曹長	西垣省之助	父 角太郎	玉昌院至道唯心居士	昭和一九年 二月三〇日 南洋群島方面ニテ戦死	二四
勲八	海軍衛生兵	西垣徳二	父 兵右衛門	温良院徳應有隣居士	昭和二〇年 二月一七日 東支那海方面ニテ戦死	一九
勲七	上等兵	森岡博	父 安左衛門	靈通院寶林淨安居士	昭和二〇年 六月 六日 ホルニョウニテ戦死	三〇
勲八	伍 長	兼井義昌	母 ふじ	喜祐院釈義晃居士	昭和二〇年 六月二三日 ピルマニニテ戦死	二九
勲八	兵 長	西垣兼雄	兄 遠太郎	天真院忠義兼居士	昭和二〇年 三月一〇日 レイテ島ニテ戦死	二三
勲八	兵 長	渡辺一夫	父 三木造	誠徳院一乘義貫居士	昭和二〇年 七月 六日 ピルマニニテ戦死	二四
勲八	伍 長	藤田三郎	兄 順治	藤田三郎之霊	昭和一九年二月二三日 比島サンフエルカントニテ戦死	二五
勲八	海兵 長	竹下保	兄 関三郎	至徳院 釈 證保	昭和二〇年 二月二六日 ルソン島マニラニテ戦死	一九

第十二節 戦後の旧三村行政

佐田 一八名

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
勲七	軍曹	中島栄一	父 猪吉	誠忠院 釈義順	昭和十三年二月二十五日 山東省河長口ニテ戦死	二六
功七	上等兵	岸本幸吉	父 勘之助	純忠院 釈殉英	昭和十三年九月二十四日 河南省刈台ニテ戦死	二二
功七	兵	堀美好	父 多六	淳忠院 美好日達居士	昭和十一年五月十三日 湖北省公安縣順林橋ニテ戦死	二三
功七	伍長	石坪清一	父 信重	善念院 釈潤清	昭和十一年七月十八日 マリアナ方面ニテ戦死	二四
勲七	主計軍曹	堀誠一	父 多六	大義院 盡忠日誠居士	昭和十一年二月二十三日 トウエー島カンシー方面ニテ戦死	二八
勲七	伍長	横谷三郎	父 周治	玉寶院 一貫良忠居士	昭和二年三月四日 キヤクビユ一縣タマンドニテ戦死	二九
勲八	兵長	岡野勇	父 幹造	正念院 釈勇藤居士	昭和二〇年八月二〇日 比島ネブロス島ニテ戦死	二二
勲六	中尉	木村正規	兄 利雄	大勇院 正雲義寛居士	昭和二〇年六月九日 千葉県東葛飾郡梅里村ニテ戦死	二六
勲八	海軍工種	石田庫一	兄 幸之助	誠信院 釈放証居士	昭和二〇年五月二十五日 舞鶴海軍工廠ニテ殉職	二九
勲八	一等兵	衣川慎一	母 ふさ	顯忠院 釈慎証居士	昭和二〇年四月四日 比島ミンダオ島パレシヤニテ戦死	二五
勲七	海軍兵曹	石田勝	母 ゆか	普放院 釈了勝居士	昭和二〇年四月一日 九州方面ニテ戦死	二三
勲八	伍長	堀井良久	父 菊太郎	誠忠院 良久日勲居士	昭和二〇年八月一〇日 比島ミンダオ島ブキトノンニテ戦死	二六
勲八	兵長	寺田正雄	父 正	龍玄院 千山祖泰居士	昭和二十一年一月三日 フイリツピンニテ戦死	二三
功七	兵長	横谷治助	姉 かつ	大勇院 義實道貫居士	昭和十七年一月一〇日 河北省藁県辛庄ニテ戦死	二四
勲七	曹長	石坪徳一	父 捨松	義達院 釈昌順	昭和二〇年七月二十七日 ビルマレジ一縣トングランニテ戦死	三〇
勲八	兵長	岡野伍一郎	妻 美つ	義芳院 釈悟法居士	昭和十九年一月一七日 レイト島タガミワンニテ戦死	二九
勲八	海軍二等機関兵	中島重蔵	父 新作	義岳院 宗勇居士	明治三十八年九月一日 日本海海軍艦三笠ニテ殉死	

東中

五名

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時
勲八	陸軍輜重卒	石田友治	父 清治	明教院釋友信	清国遼陽兵佔病院ニテ戦病死 明治三十八年一月二一日	二二二
勲八	海軍一等兵	石坪市太郎	妻 しの	報国院積均証居士	昭和三〇年八月一日 九洲方面ニテ戦死 ソ連国境ニテ戦死	二二八
勲八	整備兵	石坪市太郎	妻 しの	一道院積義現	昭和三〇年四月二二日 九洲方面ニテ戦死	三三六

後

三名

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時
勲七	曹長	橋本春雄	兄 實太郎	泰忠院義嶽勇道居士	昭和一九年九月二四日 レイト島レブ附近ニテ戦死	二二五
勲八	上等兵	衣川喜市	兄 一直	淨高院積喜乘	昭和一九年四月二二日 東京陸軍軍医学校ニテ戦病死	二二八
勲八	上等兵	小山諒一	父 為太郎	晃道院積諒一	昭和二〇年六月二四日 ハルマヘラ島ピートニテ戦病死	二二五
勲八	上等兵	田中進	母 とり	招隆院積進雄	昭和二〇年八月一日 姫路師団ニテ戦死	二二〇
勲七	海軍曹長	谷垣祐治	父 伊兵衛	眞實院祐居士	昭和一九年一月八日 南支那海方面ニテ戦死	二二六
勲七	兵長	中易頼弘	父 寛	青陽院彩譽春光雲居士	昭和一九年二月三一日 比島ニテ戦死	三三一
勲八	伍長	田口太三郎	母 みつ	眞孝院忠道一貫居士	昭和一九年六月三日 折江省衛戍衛門山ニテ戦死	二二四
勲八	上等兵	田口藤太郎	父 熊造	誠光院忠岩薫藤居士	昭和一九年五月五日 江蘇省萬王山ニテ戦死	二二二

久畑

八名

一等卒	中島市太郎	父 新作	忠道守節居士	奉天ニテ戦死 明治二八年八月四日
-----	-------	------	--------	---------------------

第十二節 戦後の旧三村行政

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
勲八	上等兵	田口治右衛門	敬太郎	宜忠院 釈慈昭	昭和四年六月二日 昭和一五年二月一八日 昭和省石門陸軍病院ニテ戦病死	二三
勲八	伍長	田口綾之助	善太郎	宜忠院 釈一英	昭和一七年三月六日 昭和省冀岳家庄ニテ戦死	二五
勲八	伍長	大槻省三	鶴造	顯誓院 釈秀昱	昭和一八年一月二日 昭和省上海市上海陸軍病院ニテ戦病死	二四
勲七	伍長	道下清三	順三郎	明心院 釈忠快	昭和一八年七月二日 ソロモン諸島方面ニテ戦死	二三
勲六	海軍一等兵	田口五郎	俊蔵	殉忠院 釈賢正	昭和一五年六月二日 江蘇省宣興縣屠家頭ニテ戦死	二二
勲七	伍長	衣川伍一	うた	淨惠院 釈純宏	昭和一五年二月九日 昭和一九年ニテ戦死	二三
勲八	上等兵	田口登	實	宜明院 釈玄紹	昭和二〇年一月九日 比島ルソン島ニテ戦死	二八
勲七	准尉	大槻均	安之助	精忠院 釈寛隆	昭和二〇年五月一日 昭和二〇年ニテ戦死	三三
勲八	兵長	道下久雄	清市	昇久院 釈教意	昭和二〇年五月一日 昭和二〇年ニテ戦死	三三
勲八	上等兵	田口一雄	利左衛門	顯切院 釈眞教	昭和一九年八月二日 台湾ニテ戦死	三四

小坂

一二名

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
勲八	上等兵	川中忠一	かね	精忠院 釈智諦居士	昭和一三年一月五日 河南省羅山野戰病院ニテ戦病死	一一
勲八	兵長	清水政市	房治	暁雲院 釈善政	昭和二〇年八月二日 湖南省衡陽第七二平站病院ニテ戦病死	三二
勲七	曹長	木村文雄	秀雄	純正院 釈文雄	昭和一九年一月二日 ソロモン群島ニテ戦死	二四
勲五	大尉	木村豊	彦右衛門	義慶院 釈豊明	昭和二〇年四月二日 中華民国ニテ戦死	三三
	海軍軍属	木村義雄	莊治	義忠院 釈大乗	昭和二〇年二月二〇日 南太平洋ニテ戦死	三二

大河内 一七名

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時
勲七	伍長	大井 忠	庄太郎	大乘院輝道清忠居士	昭和十三年四月二十三日 江蘇省刑家樓ニテ戦死	一三
勲八	上等兵	和田 富治	弥太郎	寂光院忠順淨苑居士	昭和二十一年二月一日 姫路市国立病院ニテ戦病死	三四
勲七	伍長	岸本 正美	藤太郎	報国院忠實永正居士	昭和二十年五月二十日 沖繩首里方面ニテ戦死	三一
勲八	兵長	桑垣 善二	安 栗	真孝院玉碎了念居士	昭和二十年五月二十六日 ルソン島バンバンニテ戦死	三〇
勲八	伍長	桑垣 盛夫	国之助	勇進院朴忠全盛居士	昭和二十年七月十七日 ルソン島スエバエシバ洲ニテ戦死	二三
勲八	伍長	稲本 寛	重 生	永光院大寛仁勇居士	昭和二十年七月十七日 比島レイテ島ヒリヤハ洲ニテ戦死	二三
勲八	伍長	桑垣 節雄	長 造	大節院竹堂真雄居士	昭和二十年六月二日 比島ミンドンダオ島ニテ戦病死	二八
勲八	梅兵	杉山 吉雄	栄太郎	純忠院佛海吉心居士	昭和二十年五月二十四日 ヤップ島キリベス村ニテ戦死	三六
勲八	伍長	杉山 馨	栄太郎	勲樹院忠岳清馨居士	昭和十九年十月二十九日 滿洲ハルビン病院ニテ戦病死	三三
勲八	兵長	明石 信夫	市 造	圓光院淨心全照居士	昭和二十年五月二十八日 比島マブローム島ニテ戦死	二四
勲八	兵長	杉山 實雄	正之助	盡忠院真實雄道居士	昭和十六年五月一日 鳥取陸軍病院ニテ戦病死	二六
勲八	兵長	桑垣 尊夫	太老多勇	至誠院丹心禅照居士	昭和十九年四月二三日 鳥取陸軍病院ニテ戦病死	二四
勲八	上等兵	岸本 茂男	仁 造	皎月院忠信茂勲居士	昭和十九年二月二十三日 比島ニテ戦死	二二
勲八	上等兵	桑垣 晴雄	倉 一	顯光院忠岳晴輝居士	昭和二十年二月五日 ニユ一ギニヤワイゲ島ニテ戦死	二五

勲八	伍長	大槻 茂夫	父 禎二郎	正顯院 釈 淳誓	昭和二十年六月五日 レイテ島ニテ戦死	二四
勲八	上等兵	衣川 幹三	子 幸夫	淨心院 釈 誠觀	昭和二十一年六月二十三日 滿洲ニテ戦死	三八

第十二節 戦後の旧三村行政

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
勲七	伍長	中川 專吉	兄 傳吉	亀鑑院 義勇道 專居士	昭和十三年 七月一七日 北支宗露口ニテ戦病死	二五
勲八	伍長	植田 謙治	父 岩造	精萃院 忠道 謙居士	昭和十四年一〇月 三日 河北省保定野戦病院ニテ戦病死	三三
勲七	軍曹	森 敬介	父 増之助	全忠院 孝道 義徹居士	昭和十六年 五月三〇日 広東陸軍病院ニテ戦病死	二四
勲八	上等兵	森 紀久治	兄 俊二	誠忠院 義嶽 良勇居士	昭和十八年 六月一〇日 旅順七九部隊ニテ戦病死	二四
勲八	伍長	井上 三郎	父 勤	顯彰院 忠肝 義膽居士	昭和十九年 三月一日 ビルマキヤクトウ県ハタボウニテ戦死	二七
勲五	海軍中佐	井上 諭一	妻 鶴栄	天粹院 忠鑑 慧光居士	昭和十九年 三月二〇日 内南洋方面ニテ戦死	五六
勲六	中尉	森 繁雄	父 増之助	盡忠院 泰然 義光居士	昭和十九年 三月一四日 ソロモン群島ブーゲンビルニテ戦死	二五
勲八	兵長	鍛冶 貝弥一	母 やつ	蒼光院 忠順 大義居士	昭和十九年 七月二二日 河南省第一一〇師団野戦病院ニテ戦病死	三四
勲六	軍曹	植田 林太郎	妻 つる	忠厚院 法界 良念居士	昭和二十年一〇月 五日 パラオ島和久井部隊ニテ戦病死	三六
勲八	上等兵	井上 正夫	父 常夫	臺忠院 正道 義徹居士	昭和二十年 七月 四日 台湾ニテ戦死	二一
勲七	曹長	岡村 實	父 象太郎	赤誠院 大機 清實居士	昭和二十年 二月 三日 クビユイ県野戦病院ニテ戦死	三〇
勲八	伍長	植田 金次郎	兄 一男	殉国院 金剛 淨心居士	昭和二十年 六月 二日 ビルマブローム県ポーカンニテ戦死	二六
勲八	兵長	植田 作蔵	兄 一男	泰功院 耕雲 宗作居士	昭和二十年 四月 七日 昭ソニ島ハタアン洲ヘルモサニテ戦死	二四

葉王寺

二六名

勲七	陸軍輜重 一等卒	岸本 寛司	父 慶也	赤心院 寛道 誓心居士	昭和二十二年 五月一三日 満洲開拓団デ應召戦病死	二六
		桑垣 友之助	父 勘兵衛	威徳院 樽嶽 義範居士	明治三十八年 七月 二日 鉄嶺野戦病院ニテ戦病死	二六
		和田 卯之助	父 助四郎	紀勲院 孝岳 良勇居士	明治三十八年一〇月 二日 三塊石山附近ニテ戦死	二二

資母戦没者

中山 (如布) 二五名

勳八	兵 長	大橋 太造	父	禮 吉	義徹院 釈太藏 居士	昭和二〇年二月一日 朝鮮ニテ戦死	三七
勳八	上等兵	海尻 誠一	兄	巖	大真院 圓光誠道 居士	昭和二一年三月五日 ソ連クラスノヤルクス洲ニテ戦死	二一
勳八	伍 長	大田 和芳男	兄	武 司	丹心院 順應義芳 居士	昭和二一年八月三〇日 二〇野兵器廠ニテ戦死	三五
勳八	兵 長	岡村 磯雄	母	し ぶ	報国院 靈光不味 居士	昭和二一年二月二〇日 ソ連ウスリノ洲アントノフカニテ戦死	二九
勳八	兵 長	大月 弘義	父	作 治	赤心軒 弘潤道義 居士	昭和二〇年五月四日 満洲義勇軍入隊戦病死	二二
勳八	上海等水兵	大月 禮次	妻	筆 子	顯忠院 禅海玄照 居士	昭和二〇年一月一日 南支方面ニテ戦死	三四
勳六	陸軍大尉	久 胡 清一	兄	弥 太郎	天柱院 仁勇清峻 居士	昭和二〇年一月一日 レイテ島ニテ戦死	四七
勳七	曹 長	久 胡 敏雄	父	伊 太郎	顯光院 禅機敏銳 居士	昭和二〇年七月三〇日 比島ミンダオ島ウマヤンニテ戦死	二七
勳八	伍 長	桑 垣 與一	父	宗 四郎	普光院 禅岩勇猛 居士	昭和二一年一月五日 朝鮮感鏡南道興南ニテ戦病死	四〇
勳七	上等兵	井 上 元七	父	定 治	最忠院 泰勇義勝 居士	明治三七年九月四日 遼陽ニテ戦死	二五
勳七	一等卒	井 上 仲造	父	伊 作	功勳院 忠岳義純 居士	明治三七年九月四日 遼陽ニテ戦死	二六
勳七	陸軍輜重	井 上 卯一	父	助 五郎	昭徳院 征功露勇 居士	明治三八年七月二十六日 鉄嶺兵站病院ニテ戦病死	二四
勳七	日本赤十字社看護人	久 胡 又次郎	兄	梅 造	旭隆軒 遼岳義陽 居士	明治三八年五月十四日 遼陽西八重庄野戦病院ニテ戦病死	三五

叙勳	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時
旭七	軍曹	渡辺 忠治	妻 梅野	剛光院 盡道宗忠 居士	昭和四四年三月一日 河北省易県北河ニテ戦死	三八
伍 長	加藤 三郎	父 長藏	英 光院 真緒宣観 居士	昭和一七年六月三〇日 復員後病死	三一	

第十二節 戦後の旧三村行政

旭八	旭八	旭八	旭八	旭八	旭七	旭七	旭七	旭八	旭八	旭八	旭八	旭七	旭八	瑞八	旭七	旭八	旭八	旭八	旭八
伍長	上等兵	伍長	兵長	兵長	上等兵	二等機曹	伍長	伍長	兵長	兵長	伍長	准尉	兵長	上等兵	兵長	上等兵曹	一等兵	兵長	海軍軍属
堀芳三	森本憲次郎	岩吹高雄	岩吹登	田中利治	入山庄次郎	加藤仙之助	小牧一郎	宮垣謙介	宮垣龍馬	福田貞一	宮垣悦次郎	宮垣健三郎	戸垣哲二	柴原元治郎	田中勝	中西秋雄	福田源治	上田雪造	
父	父	父	父	妻	妻	父	母	父	父	父	父	父	母	父	妻	父	父	父	
三芳	品造	栄治郎	栄治郎	喜代子	せつ	庄太郎	古布柳	奎次	奎次	品治	重太郎	重太郎	あさ	音吉	貞恵	喜由	長治郎	要造	
忠昶院英芳義詰居士		忠邵院高節祖深居士	忠審院賢才祖登居士	忠詰院利剣智光居士	観明院誠誉徳道居士	永忠院仙桂宗丹居士	忠彰院一心宗徹居士	忠信院敬堂義謙居士	忠信院法龍祖典居士	忠貞院誠堂義敬居士	忠慎院康堂宗悦居士	全忠院勇堂宗健居士	超脱院英芳宗哲居士	忠信院顕道日元居士	勝光院誠堂一至居士	義山院秋烈日功居士	誠心院勇健日源居士	実功院忠道紹敦居士	
昭和二十年五月一日ソ連ハバロ	昭和二十年八月九日北緯一海度	昭和二十年九月二日	昭和二十年六月二日比島ルソン	昭和二十年六月二日	昭和二十年四月九日	昭和二十年四月八日	昭和二十年四月九日	昭和二十年四月九日	昭和二十年六月二日	昭和二十年三月一日	昭和二十年四月三日	昭和二十年三月三日	昭和二十年七月二日	昭和二十年七月二日	昭和二十年七月二日	昭和二十年七月二日	昭和二十年七月二日	昭和二十年七月二日	昭和二十年七月二日
二四	二二	二六	二三	三四	三三	二二	二八	二六	三二	二五	二八	二四	二三	三一	二八	二二	二二	二九	

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
旭八	兵長	渋谷喜吉	津屋野	雄光院喜道忠念居士	昭和七年二月〇日 ア島ギルワ附近ニテ戦死	二九
旭八	二等兵曹	渡辺三代志	かめ	遠猷院鉄念宗精居士	昭和十八年二月八日 南洋群島方面ニテ戦死	二七
旭八	海軍軍属	古川利喜之助	松枝	増崇院利剣宗喜居士	昭和十九年二月二三日 太平洋方面ニテ戦死	三一
旭八	兵長	渡辺守一	武司	大念院守節宗護居士	昭和一九年八月二三日 第一〇師団野戦病院ニテ戦病死	二八
旭八	伍長	福田儀一郎	弁造	忠恭院嚴堂良儀居士	昭和十九年二月二三日 エルナンド北方洋上ニテ戦死	二五
旭七	軍曹	宮垣久夫	戸垣や系	真忠院悠玄宗久居士	昭和二十年五月二九日 ネグロス島ニテ戦死	二七
旭八	伍長	古川三治	ゆか	忠顕院三堂宗宥居士	昭和二十年一月六日 キヤブ県ミヨボン西方ウドウニテ戦死	二八
旭七	衛生兵長	渋谷諫一	春枝	忠諫院説堂宗喜居士	昭和二十年四月二日 比島ルソン島パレテ時ニテ戦死	二三
旭七	兵長	渋谷確矣	初枝	義光院確心宗忠居士	昭和二十年七月一日 京都大学病院ニテ病死	二三
旭七	伍長	渡辺関雄	ため	忠晶院関山義令居士	昭和二十年七月二〇日 ビロトング1県カニクイン西方ク	三〇
旭七	上等兵曹	上田豊	松造	泰忠院豊功義隆居士	昭和十九年八月八日 八南洋群島大宮島ニテ戦死	二六
旭八	上等水兵	渡辺誠一	はる	忠効院一道宗誠居士	昭和二十年二月二六日 比島マニラ市街戦ニテ戦死	三七

中山 (赤野) 一六名

旭八	伍長	宮垣加一	もと	忠珪院亨道玄利居士	昭和二十年四月二六日 比島ルソン島クザール湖モンタルバン東方ニテ戦死	二二
旭八	陸軍大尉	上田章	逸三	忠章院顕道宗達居士	昭和二十年八月三日 満州国興安北省索倫旗附近ニテ戦死	二六
旭七	兵曹長	堀儀八郎	三恵造		昭和二十年二月二三日 比島方面マニラ市街戦ニテ戦死	
兵長	河村孝	孝妻	登美子		昭和十九年二月二日 ベリリュウ島ニテ戦死	

第十二節 戦後の旧三村行政

口藤

一五名

叙勲	階級	氏名	遺	族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
旭八	上等兵	山本安太郎	弟	清太郎	勇功院本嶽義安居士	明治三八年九月一〇日 清国第二野戦病院ニテ戦病死	二二
旭八	上等兵	松村善治	父	慶四郎	大忠院善応了徹居士	昭和一九年二月一三日 昭ユ一ブリテン島テパールニテ戦死	二四
旭八	長	松村安治	父	慶四郎	彰中院道安義徹居士	昭和二〇年一月一〇日 キヤブ県カンザークニテ戦死	二八
旭八	長	山本一夫	父	貞造	顯忠院義芳一枝居士	昭和一九年二月三日 ベリユ一島ニテ戦死	三〇
旭八	長	山本毅	父	寅藏	宗忠院毅山道雄居士	昭和二〇年五月四日 中支河南省内郷県方面ニテ戦死	三四
旭七	長	山本平兵衛	父	平太	忠敬院平心義泰居士	昭和二〇年七月二七日 昭ク一県レジーニテ戦死	二九
旭七	長	山本隆	母	まつ	鑑忠院義山道隆居士	昭和二〇年六月一五日 島パキオ東方山地ニテ戦死	二九
旭八	上等兵	野村静夫	父	山本弘三	王芳院忠山静雄居士	昭和一七年六月二日 比島パタン半島ニテ戦死	二二
旭八	曹	渋谷兔四男	母	於登野	明光院天真月兔居士	昭和一三年四月二八日 中華民國江蘇省大石埠ニテ戦死	二三
兵	長	渋谷良一	妻	浪江	浄光院大門良至居士	昭和二〇年八月八日 比島ルソソ島クザイル州モンタルパン	四二
兵	長	渋谷隆夫	母	はる	懿忠院義道宗隆居士	昭和二〇年六月一五日 島パキオ東方山地ニテ戦死	二三

虫生

一一名

旭七	伍長	古川大六	父	昇太郎	忠亨院大道宗源居士	昭和二〇年七月三十一日 島タバオ州ソガンニテ戦死	二九
旭八	陸軍中尉	福田千秋	妻	フミ	瑞光院大成日完居士	昭和一八年一月二日 ヤ島ヨリ、クレムニ輸送中戦死確認	三七
旭八	一等兵	山本丹次	母	ゆき	昌光院丹念宗誠居士	昭和二二年四月一六日 復員後病死	二九
旭八	上等兵	福田潤二	母	いゑ	忠祥院順法理正居士	熊本陸軍病院ニテ戦病死	二五

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
叙勲七	三等兵曹	平野三郎	父 貞治	良忠院吹毛利劍居士	昭和十三年一月二日 上海海軍病院ニテ戦死	二九
勲七	伍長	小畑政雄	妻 うめ	大中院全光政雄居士	昭和十五年六月五日 河北省広宗県タイバクニテ戦死	三二
勲七	機二閑兵等	小畑幸男	父 定造	昭光院大洋宗忠居士	昭和十七年八月二八日 昭和一七年ア方面ニテ戦死	一七
勲七	機一閑兵等	平野春治	父 国藏	大洋院顕光良義居士	昭和十七年六月七日 太平洋方面ニテ戦死	二三
旭八	上等兵	小坂一郎	妻 よね	天忠院一道良心居士	昭和十八年三月三日 ア島クレチン岬南方約四〇軒ニテ戦死	三四
旭八	海軍軍属	平野実治	妻 八重子	実相院大光正道居士	昭和十九年二月二日 仏印方面ニテ戦死	四〇
旭八	上等兵	平野俊行	父 義夫	俊光院貫山義行居士	昭和十九年二月五日 西部ニューギニア、ニューブリテン島 方面ニテ戦死	二二
旭七	曹長	小坂守	父 仙太郎	大柱院泰岳勇道居士	昭和二十年八月二日 ホーゲンビル島キビノニテ戦病死	二七
	兵長	小畑一雄	父 庄右衛門	誠昭院一貫良雄居士	昭和十九年二月六日 ヤブ県ミヨシ第二野戦病院ニテ戦病死	二二
	兵長	小畑進	父 庄右衛門	真照院英岳義進居士	昭和二十年四月二日 ルソン島パタン峙ニテ戦死	二五
旭八	軍属	柿原勝一	妻 まつ	義雲院重堂明喜居士	昭和二十年六月二五日 ラーク、コイルドニテ戦死	二七
旭八	伍長	石田道夫	父 清一	高雲院照月徹心居士	昭和二十年五月二八日 ス島マングラカン山中ニテ戦死	四〇
	伍長	松本康鷄	父 宗吉	忠哲院道雄義光居士	昭和二十年七月四日 マリホス州ラポニテ戦死	二三
旭七	伍長	北風甚一	妹 絹江	大心院昭岳義光居士	昭和十九年一月七日 ブ1ゲンビル島北ガロベ島ニテ戦死	二三
				英光院正雲義寛居士	昭和二十年二月三日 クビユー、県ミエボン郡タングモニテ戦死	三〇

中藤

一八名

第十二節 戦後の旧三村行政

奥藤

七名

旭七	旭七	旭七	旭七	旭七	旭八	旭七	旭八	旭八	旭八	旭八	旭八	旭七	旭八	旭七	旭七	旭七	旭七
一等兵曹	曹長	上等兵	兵曹長	一等兵	伍長	兵長	兵長	上等兵	上等兵	兵長	上等水兵	兵長	上等水兵	伍長	曹長	兵曹長	伍長
北風正夫	清水春治	清水謙一	北風弥一	清水巧	和田孝一	佐古順一	才田一夫	松本康一	小畑伊太郎	才田房治	小坂強	松本秀雄	山本重吉	松葉義一	有吉隆一	松本藤男	和田永次
妻	妻	妻	妻	父	妻	妻	母	父	妻	父	妻	父	妻	父	妻	長女	父
きみ子	ふみ	むつ	律子	磯治	まさ子	一栄	すが	栄一郎	まき	亀造	わき	為造	きの	定吉	ちゑの	茂子	和平
放光院鉄心正道居士	正真院春光宗説居士	誠信院謙逆義裕居士	弥猛院義烈良忠居士	清巧院忠泉湧孝居士	自性院孝道義純居士	義光院信堂良順居士	正雲院義峰大徹居士	至誠院正覚道康居士	英照院大柱正道居士	大雲院正嚴義道居士	報国院強道義心居士	徹心院義秀忠雄居士	最勝院忠山重光居士	誠心院大光義徹居士	大光院義山良忠居士	鉄心院忠山良義居士	大勇院貫忠義烈居士
昭和十九年七月一六日	昭和二十一年六月二日	昭和二十一年八月三日	昭和二十一年八月三日	昭和二十一年七月七日	昭和二十一年八月二日	昭和二十一年四月二日	昭和二十一年六月二日	昭和二十一年十月二日	昭和二十一年一月二日	昭和二十一年七月九日	昭和二十一年二月八日	昭和二十一年二月二日	昭和二十一年七月七日	昭和二十一年一月三日	昭和二十一年四月四日	昭和二十一年四月四日	昭和二十一年三月十八日
ト	南京第一五六病院ニテ戦病死	北太平洋方面ニテ戦死	岡山県津山陸軍病院ニテ公病死	昭和二十一年ハバロスク病院ニテ病死	昭和二十一年四月二日	昭和二十一年四月二日	昭和二十一年四月二日	昭和二十一年四月二日	昭和二十一年四月二日	昭和二十一年四月二日	昭和二十一年四月二日	昭和二十一年四月二日	昭和二十一年四月二日	昭和二十一年四月二日	昭和二十一年四月二日	昭和二十一年四月二日	昭和二十一年四月二日
三一	三七	三四	三三	三二	三四	二九	二二	二二	三九	二八	三七	二八	三六	二四	三四	二九	

奥赤 八名

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ戦没時 ノ戦没時
旭八	伍長	森下鉄雄	父 久吉	忠烈院鉄雄日逞居士	昭和四年六月五日 中国江蘇省丹徒県鎮江錠泊場揚子江内ニテ公病死	三三二
旭七	軍曹	能勢久雄	父 辰造	本光院悠久日生居士	昭和二年三月二日 岡山陸軍病院ニテ公病死	二二一
旭八	伍長	兼井重喜	兄 市石五門	誠忠院法行日重居士	昭和十六年一月九日 中国河北省陸軍病院ニテ戦病死	二二八
旭八	伍長	小西梅太郎	妻 みつ系	威烈院梅薫忠道居士	昭和二年五月八日 中国河北省陸軍病院ニテ戦病死	二二九
旭七	伍長	兼井秀雄	父 岩造	大乗院宣光日秀居士	昭和二年七月二日 戦死	二二六
旭八	伍長	伊崎章	父 浅次	常光院徹真義章居士	昭和九年三月四日 ソロモン群島ホーゲンビル島方面ニテ戦死	二二五
旭七	伍長	桑垣忠夫	兄 淳一	天真院英俊玄忠居士	昭和二年七月四日 戦死	二二八
旭八	伍長	桑垣巖	父 淳一	天鏡院真巖道光居士	昭和二年七月二日 戦死	三三一

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ戦没時
旭八	上等兵	渋谷重記	母 くらお	重光院義山善記居士	昭和五年一月四日 蘇州呉県陸軍病院ニテ戦病死	二二二
旭八	上等兵	松本智郎	父 元造	松嶽院忠孝俱全居士	昭和九年十月二日 比島方面ニテ戦死	二二〇
旭七	上等兵	佐古穰	父 弥之助	顕光院誠岳穰道居士	昭和二年六月二十五日 北ボルネオ島サンダカン州コヤ河合島嶼占附近ニテ戦死	二一九
旭八	伍長	松本義男	父 元造	真光院義覚雄道居士	昭和九年二月八日 東径一〇一度北緯一八度五〇分タルビ	二二七
旭七	憲兵准尉	水口正	父 広吉	正光院真道義鑑居士	昭和二年七月一日 比島ルソン島リザール州マニラ東方接点ニテ戦死	二一九
旭八	海軍軍属	渋谷博	母 きく系	晴宵院博信義光居士	昭和二年三月三日 南支那海ニテ戦死認定	二二三
旭八	兵長	佐古正男	兄 実		昭和九年二月三十一日 比島方面ニテ戦死	三三一

第十二節 戦後の旧三村行政

赤花

二三名

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
旭八	一等卒	小西 滝造	父 八百造	忠道院 隆勇日進居士	明治二八年七月一〇日 明治二七、八年戦従 清国遼陽ニ於テ戦死	二三
旭八	上等兵	小西 隆治	父 文平	大雄院 貫道慈航居士	昭和一九年一〇月二五日 北太平洋方面ニテ戦死	二二
旭八	工作兵長	小西 貫一	父 仲造	誠忠院 禅巖義光居士	昭和二〇年三月九日 ニユーブリテ	二四
旭八	伍長	渡辺 巖	父 房造	大雲院 忠誠日兼居士	昭和一九年四月二〇日 ニユーブリテ	二三
旭八	伍長	小西 兼治	母 けい	殉国院 華嶽道茂居士	昭和二〇年九月二五日 江西省第一七七兵站病院ニテ戦病死	二六
旭八	伍長	大西 茂	父 新三郎	大乗院 久光良雄居士	昭和二〇年四月二四日 比島ルソン島クラーク地ニテ戦死	三五
旭七	上等兵曹	小西 久良夫	妻 つぎ	忠匡院 広念宗普居士	昭和二〇年五月五日 沖繩本島前田ニテ戦死	三二
旭八	兵長	小西 庫一	父 長三	清雲院 大洋顕光居士	昭和二〇年二月一七日 比島方面ニテ戦死	二四
旭八	上機兵等	小西 五郎	父 又三	照雲院 功山義英居士	昭和二〇年二月一〇日 比島方面ニテ戦死	二八
旭八	衛生伍長	八野 三郎	父 平右衛門	昭勲院 滄甫玄意居士	昭和二〇年一月二四日 中華民国湖北省ニテ戦死	三五
旭八	兵長	小西 宗尾	母 げん	靖忠院 正綱日鉄居士	昭和一九年六月 東太平洋方面ミッドウェーニテ戦死	二五
旭八	三等兵曹	能勢 鉄一	父 宇作	丹心院 誠忠日久居士	昭和一九年四月三日 牡丹江省移陸軍病院ニテ戦病死	二五
旭七	軍曹	奥田 久治	父 幸之助	開道院 義栄日光居士	昭和一九年一〇月一五日 本邦南方海面ニテ戦病死	二二
旭八	水兵長	能勢 三雄	父 平八	頭忠院 貫道日勇居士	昭和一九年七月一〇日 中国広東省台山県南山附近ニテ戦死	二二
旭八	水兵長	能勢 三郎	父 幾太郎	義宏院 忠節日秀居士	昭和二〇年四月七日 西太平洋方面ニテ戦死	二〇
旭八	水兵長	能勢 秀吉	父 正一郎	尽義院 思国日勇居士	昭和二〇年三月二日 南洋群島パラオ島ニテ戦病死	三三
旭八	水兵長	小西 慎造	父 覚造			

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時
旭七	伍長	山本康之助	母あ	永隆院康品崇達居士	昭和十三年七月二十九日 東京第三陸軍病院ニテ戦病死	一八
旭八	一等卒	今井森造	弟鶴	精忠院勇岳義功居士	明治三七年一月二日 清国盛京省三穗石山ニテ戦死	一七
旭八	陸軍軍属	羽尻佳一	母	遠洋院佳碎一貫居士	昭和十八年八月四日 ホルネオ南海上ニテ戦死確認	一四
旭八	海軍軍属	藤田清吉	母	忠芳院泰道宗清居士	昭和十八年一月二十五日 キルバート諸島方面ニテ戦死	一四
旭七	伍長	今井友一	妻	浄光院劍甫京忠居士	昭和二十年四月十九日 ホルネオサンダカンニテ戦病死	三四

畑山

一九名

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時
旭八	伍長	新野勉	父	忠侃院勉堂義学居士	昭和二十年七月二十七日 レイテ島ビルヤバニテ戦死	二四
旭八	兵長	小谷正夫	母	忠勤院靈法義感居士	昭和二十年二月二十五日 ビルマ、キヤクビ一県ダレーニテ戦死	二三
旭八	陸軍軍属	霜倉兼治	兄	忠亮院兼法利濟居士	昭和二十三年九月五日 昭州スイソエフカニテ戦病死	三〇

坂津

三名

旭八	一等兵	本田隆	父	本隆院忠烈日勇居士	昭和十七年六月二日 昭集解除後死亡	二四
旭八	伍長	山本林助	父	忠林院義岳日耀居士	昭和二十年三月一日 マニラ市東方約二〇軒ニテ戦死	二四
旭八位	中尉	奥田金次郎	母	義秀院金徹日道居士	昭和二十年五月十六日 島クザール州モンタルパンニテ戦死	二五
旭八位	海軍軍属	小西龍一	父	大乘院龍岳日義大清居士	昭和二十年六月一日 フイリクソビニテ戦死	
旭八位	海軍軍属	本田関三郎	母	本覚院烈日関居士	昭和十九年五月二十九日 南群島ニテ戦病死	

太田

三名

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
旭八	兵長	下中彦二	みよ	義徳院釈智証居士	昭和一六年八月一戦死	二七
旭七	兵長	清水弘	安太郎	恵海院釈隆証居士	昭和一九年七月一八日戦死	二七
旭八	軍伍	清水謙次	ゆき乃	忠誠院釈顕道居士	昭和一九年七月二四日戦死	二七
旭七	軍伍	清水論隆	茂子	忠孝院釈弘心居士	昭和一九年一〇月二九日戦死	二五
旭七	軍曹	笹部賢三	佐太郎	翠光院釈大康居士	昭和一九年八月五日ニューブリ	二四
旭八	兵長	笹部千代志	いと	義章院釈政玄居士	昭和二〇年二月二〇日比島ルソン	二六

東里

六名

旭八	伍長	永井権吉	父	至誠院義山道権居士	明治三八年六月一七日病死	二六
旭八	伍長	野村昇	父	貫忠院昇徳義襄居士	昭和二〇年一月一七日戦死	二六
旭八	伍長	羽尻与志夫	妻	忠欣院庸堂義功居士	昭和二〇年七月二三日オ島ズキトノ州マナゴ	二七
旭八	伍長	羽尻真一	母	忠間院真道宗一居士	昭和二〇年六月八日沖繩本島国吉ニテ戦死	二三
旭八	伍長	野村八郎	父	忠疑院誠道宗愿居士	昭和二〇年七月九日河畔ニテ戦死	二三
旭八	伍長	永井経宣	父	殉国院経山宣道居士	昭和二〇年四月一日比島セブ島セブ市附近ニテ戦死	二三
旭八	伍長	永井勉	妻	殉国院勉宗魁学居士	昭和二〇年五月二六日沖繩本島宣寿次ニテ戦死	二三
旭八	伍長	永井知之	父	殉国院知学道之居士	昭和二〇年一〇月一二日朝鮮興南ニテ戦病死	二三

第十二節 戦後の旧三村行政

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
旭八	伍長	沢田武治	父 徳市	増信院武功宗尚居士	昭和一九年一月二六日戦死	一三三
旭八	二等兵曹	藤原鉄夫	父 敬治郎	忠光院利道紹鉄居士	昭和一九年八月二日戦死	一三三
旭八	上等兵	高木正義	妻 みき	永光院正道良義居士	昭和二〇年一月二日戦死	一三二
旭八	水兵長	窪田三代志	妻 りゑ	忠貞院三堂義常居士	昭和二〇年五月三日戦死	一三六
旭八	伍長	沢田正行	母 せつ	詔法院积正行居士	昭和二〇年四月一五日戦死	一三六
旭八	伍長	沢田輝	父 松之助	大智院勇健日輝居士	昭和二〇年五月六日 比島ルソノ島又エバビスカヤ州サランクサクテ戦死	一三六
旭七	軍曹	高木五郎	母 ユキ	忠綱院五嶽宗紀居士	昭和二〇年一月二三日戦病死	一三三
旭八	陸軍軍属	中西春夫	父 鶴蔵	殉誠院积至融居士	昭和二年六月三日 満州北安街北安病院ニテ戦病死	一九
旭七位	海軍大尉	太田博之	父 喜一	無量光院博崖一之居士	昭和二〇年三月一七日 小笠原諸島方面ニテ戦死	一三二

西野々

一名

木村

九名

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
旭六	中尉	谷脇敏夫	母 かの	尽誠院敏勇居士	昭和二〇年五月二日戦死	二七
旭七	伍長	上田正一	妻 花枝	忠恒院一貫義正居士	昭和二年三月三十一日 満州間島省延吉ニテ栄養失調ニヨリ戦病死	三七
	伍長	井上義文	母 文江		昭和二〇年九月三日 昭和二一キニアサルミニテ戦病死	

旭八	輻重輪卒	森本勝太郎	父	芳造	本誓院全応義勝居士	明治三八年七月二日 清国盛京省 臨時鉄道大隊橋頭患者療養所ニテ戦病死	一一一
----	------	-------	---	----	-----------	---------------------------------------	-----

高竜寺

五名

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
旭八	上等水兵	大石重夫	妻 房子	壯忠院重念宗九居士	昭和二〇年三月二八日 九州東方海面ニテ戦死	三四
旭七	軍曹	井地岩夫	妻 きみ	長光院功叔良忠居士	昭和二〇年四月九日 北ボルネオニテ戦病死	三〇
旭七	長	宮垣九兵衛	母 あさ	忠倫院九峯義阜居士	昭和一九年二月一五日 ニューギニア方面ニテ戦病死	二九
旭七	長	井地 勇	父 栄之助	忠康院尚山義勇居士	昭和二〇年六月三日 沖繩本島沖間ニテ戦死	二八
旭八	兵長	太田三郎	父 達治	忠道院三諦日融居士	昭和二〇年七月カバカニテ戦病死	二九

坂野

一二名

叙勲	階級	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
旭八	上等兵	岡田重雄	父 光藏	誠光院殉法義全居士	昭和一三年一〇月一日 河南省信陽東南馬灣ニテ戦死	一三三
旭七	伍長	西田 保	父 寅藏	格正院保全義佑居士	昭和四年七月二六日 河南省寧善ニテ戦病死	一四
旭八	上等兵	橋本三好	父 甚太郎	永昌院大光義勲居士	昭和一九年六月二九日 姫路陸軍病院姫山分院ニテ戦病死	二四
旭八	海軍軍属	小西一雄	妻 好枝	報国院一乘日道居士	昭和一九年九月二五日 マリアナ群島方面ニテ戦死	二三三
旭八	兵長	高垣 襄	妻 幸栄	純忠院賛学義襄居士	昭和二十一年三月五日 一五師団野戦病院ニテ戦病死	三四
旭七	曹長	高垣市郎	父 長藏	忠謹院諄堂義厚居士	昭和二〇年五月八日 ローム市北方三〇軒街道ニテ戦死	二一九
旭八	兵長	岡田治郎	父 庄太郎	忠契院宗性義賢居士	昭和二〇年六月一五日 島マニラ東方五〇軒ニテ戦死	二四

旭八	伍長	小西三夫	兄	福松	円融院三諦日熟居士	昭和二〇年五月五日 比島ルソン島バレットニテ戦死	二三
旭八	伍長	岡田伊三夫	父	重之助	忠歆院功烈義庸居士	昭和二〇年五月五日 沖繩本島前田ニテ戦死	二九
兵長	高垣駿	妻	喜代子			昭和一九年八月三日 北方方面ニテ戦病死	
伍長	西田誠	父	文左衛門	恪忠院誠道一貫居士	昭和一九年七月一八日 マリアナ群島方面ニテ戦死	昭和一九年七月一八日 マリアナ群島方面ニテ戦死	
上等兵	石本米次郎	母	フヂエ	純光院剛道宗侃居士	昭和一八年一〇月一二日 スマトラ島ニテ戦死	昭和一八年一〇月一二日 スマトラ島ニテ戦死	

満州開拓団

四名

叙勲	氏名	遺族	法名	戦没年月日及位置	戦没時 ノ年令
旭八	安井れい子	夫	清志 積	昭和二〇年八月三十一日 満州浜口省蘭西県北安 に於て自決（もと高橋村出身 戦後資母村転住）	二四
旭八	安井八重子	兄	清志 積	同	一五
	安井清美	父	清志 須	同	二三
旭八	小畑俊子	夫	武志 智	昭和二〇年八月二七日 依蘭県土台橋にて住民の襲撃を受け死亡	二三

四、満州開拓青少年義勇軍の人びと

政府は昭和一三年度満州青年移民（青少年義勇軍）募集要綱を定め、年令数え年一六才ないし一九才とし、尋常小学校を終え身体強壯で満州に永住の決心をもち、父兄の承諾ある者に限ってまづ三万人を募集した。いうまでもなく国策移民の先駆的中核をなすものであった。

これら青少年は茨城県東茨城郡下中妻村の内原訓練所（所長加藤完治・日輪兵舎ともいう）に二カ月間、

青少年の心身を鍛錬し日本精神の徹底および協同精神の涵養を期するとともに、現地訓練所に必要な予備的訓練を行なう一こととした。（「満州開拓史」同史刊行会編 昭和四一年刊）

これを終るとそれぞれの隊組織編成により渡満して三ケ年間、現地訓練として各種訓練をうける。その科目はつぎのとおりであった。

修身公民（国民常識、法制、経済など）

一般訓練 軍事（警備、戦闘、防空防謀など）

農事訓練（満州農業の体得）

特技訓練（農業、加工、測量、通信、衛生など）

武道体育訓練（銃剣術、剣道、柔道など）

生活訓練（日常生活の規制など）

をつけるものとされた。これに志願し、現地に行った青少年はつぎのとおりであったが、ついに彼地で死没したものもあり、無事帰国し、こんにち社会人として活動している人もある。

大・字 氏名 内原訓練所入所 満州現地入り 帰国

小坂 後 孝一 昭和一三年一〇月 一四年 二月 一九年 四月

小坂 田口 實 一六・三 一六・六 二〇・八

佐田 堀 一三五 一七・二 一七・五 二四・二二

佐田 赤石 真介 一六・三 一六・六 二一・一〇

大河内 岸本 泰之 昭和十七年 二月 一七年 五月 二一年一〇月

奥矢根 森 茂美 一四・四 一四・七 現地召集二九年一月
病死と断定さる

相田 本田 隆夫 一八・二 一八・五 二〇・一

高竜寺 沢田 文夫 一四・四 一四・六 病氣一九・秋帰国自宅
二〇・六・一死亡

日向 羽尻 光治 一六・四 一六・七 三・春

赤花 能勢 福一 一八・四 一八・七 二二・夏

以上一〇人

これらの人のうちには国策に應じ、使命感に燃え、ひたすら純粹に生きようとし、未知の大陸の厳しい現実と苦闘しながら、貴重な手記を残している人もある。その一部をみよう。

五月一五日 南 曇晴 蔬菜時付（豆類、ゴボウ、人参、瓜、大根、白菜、ねぎ）プラウ

五月一六日 南 曇雨 舍外整理 カケヤ作り プ

ラウ

五月一七日 南東 雨曇 休養

五月一八月 南 曇 プラウ 馬病氣

義勇軍拓士の手記

名馬は毛に
あらづ
士は志にあり

自分は今も身体には
恵まれておるが志は立派
に持ち日本人としての道
を歩まざるべからざる

高竜寺 沢田家 蔵

五月一九日	南東	曇晴	午前休舎外整備	午後プラウ	馬病気
五月二〇日	南	曇	午前人參、ゴボウ蒔付	午後蓬刈	ハロウ
五月二一日	南	曇晴	午前鶏豆蒔	午後大豆包米	ハロウ
五月二二日	南北	曇雨	午前後豚舎造り	プラウ	ハロウ（除草）
五月二三日	南西	曇	ネギ	カルチペーター	配給サトウ
五月二四日	南	雨	休養		
五月二五日	南東	雨曇	プラウ	ハロウ豚舎	軽油、鰯（現地訓練所「鉄嶺日記」から）

五、戦後の農地改革

1、農地改革の意義

農民を労働地代や現物小作料から解放して、独立自営の農民とし、農業生産力の近代化と、農民所得の上昇の基礎を築くという農地改革は、多くの先進国では封建制度崩壊の直後に行われるのが普通であった。この農地改革によつて農民は半封建的な地代收取形態から解放され、近代化機械化により工業におけるような産業革命に匹敵する農業革命に発展する契機を与えられるのが普通であった。しかし諸外国と立おかれて封建制から近代化への途を辿ったわが国は、低賃金の基礎を農村の豊富低廉な農家人口に求め、農地改革を行わず、戦中戦後まで高率の現物小作料を基盤とする地主制をそのまま維持存続してきた。いわば農村における地主制を維持し、低賃金の基礎を守ることによつて商工業を進展せしめ、富国強兵と、国家経済の発展を

遂行してきたといえる。

しかし戦後の民主化と諸改革においては、この改革を避けて通ることは出来なかったし、占領軍であるGHQも強くそれを強要し、日本民主化の第一歩としようとした。このため戦後の政府は、早くも第一次農地改革の粗案を発表したが、それはなお中小地主制を維持し、安易な自作農創設を中心とするものであった。次にそれをみよう。

2、第一次農地改革

昭和二〇年一月新しく発足した農林省発表の第一次農地改革案の骨子は次のようなものであった。

(一)自作農創設の強化

(二)小作料金納化と統制

(三)農地価格の統制

(四)農地の移動統制

(五)市町村農地委員会の刷新

(六)耕作権の安定

これは五カ年で一五〇万町歩について自作農を創設しようとするもので、市町村農地委員会が斡旋し、協議により譲渡させようとするもので、小作契約の解約の承認も農地委員会を活用しようとするものであった。この委員会は、村の顔役三人の官選を加へており、民主的なものでなかった。これに対して、昭和二〇年一月、GHQの「農地改革に関する覚書」を指令し、その不徹底な政策の是正を命じた。政府はこれによつ

て第二次農地改革計画をまとめ、ソ連案、英国案等をも参考にし第二次改革案をまとめた。

3、第二次農地改革と農地委員の改選

第二次農地改革の骨子は次のようなものであった。

- (1) 国が地主から強制買収し、小作農に売渡し、地主小作間の相対売買を認めない。
- (2) 買収は不在地主の土地、在村地主の一町歩以上の土地で、全小作地の八二%（内地八三%北海道七八%）を解放する。

(3) 買収地価は反当り田二二〇円、畑一三〇円とし、四、〇〇〇円まで現金、それ以上は二四年均等償還の農地証券とし、小作人にも二四年以内の年賦支払を認める。

(4) 買収売渡しの事務は、小作五、地主三、自作二の構成で選挙された市町村農地委員会で行ない、知事の名で買収し売渡す。

(5) 未墾地も買収し、耕作者に配分する。（内地四六万余町歩、北海道六四万余町歩）

(6) 農地の移動制限を強化し、知事の許可制とする。

(7) 耕作権を強化し、小作料の最高限を定め金納とする。
等であった。

このような農地改革の実施機関である農地委員会は、昭和二一年一二月下旬全国一斉に行われ、投票により選出された全国の農地委員数は一〇、九九五人で、そのうち小作層から四、四四二人（四〇・四%）地主層二、五四八人（二三・二%）自作層四、八一六人（四三・八%）であった。また会長の階層別選出状況は、

昭和二二年三月では小作二五%、地主三九%、自作三五%、中立二%の割合であったが、同年八月の調査では小作層から二六%、地主層から三八%、自作層から三四%、中立二%となり、小作層選出会長が一%増加した。

但東町内旧三村でもそれぞれ農地委員が選挙され、昭和二六年八月一日の「資母村弘報」には、地主委員で会長の今出嘉平、小作・自作委員の今井駿之助の「農地改革を語る」紙上座談会が掲載されているがこれら委員の他、各部落の補助員の協力が大きかったことがのべられている。

但東町における農地解放は、例えば資母村下では前後一六回に亘って行われ、田一二二、六九町歩、畑二三、七町歩が自作地となった。買収対価は田畑合計一〇六万五、三〇八円、宅地九、九七八坪七万二千円、建物四棟一万二、八〇〇円、牧野九反八畝一、四六六坪、採草地四町六反五畝六、五四九円が買収され耕作者に売渡された。関係地主数二八六、法人六、売渡戸数は延五〇〇余戸、登記延筆数は六、五〇〇筆（一六次売収までに宅地其他も三、四〇〇筆）に上った。

いま昭和二八年に発行された「兵庫農地改革史」により、但東町における三村別の農地等買収実績及び売渡し（解放）実績をみれば次表のようである。

買収は農地、宅地、建物、牧野採草地、農用施設に亘るが、まず三村別の買収面積についてみれば、合橋村一五一町歩（対価一二万余円）高橋村六五町歩（四四万円）資母村は前述のように一五一町歩（一〇三万五千余円）であった。その他三村合計で宅地二〇、四一二坪（一四万円）牧野、採草地四〇町歩（五万四千円）その他報償金を三三万円支出し、三一三万円を買収その他の支払いに当てたことになっている。

図表 86 但東町における農地等買収の実績

区 別	合 橋 村	高 橋 村	資 母 村	計
農地面積	1,506.4反	652.7	1,509.7	3,669.0反
◇ 件数	661円	589	571	1,821
◇ 対価	1,123,690円	445,562	1,035,797	2,605,049
宅地坪数	10,120坪	225	10,037	20,412
◇ 件数	139	3	136	278
◇ 対価	61,447	5,743	72,147	139,337
建物件数	—	—	4	4
◇ 対価	—	—	12,800	12,800
牧野採草地	258,615反	81,315	56,903	396,903
◇ 件数	118	64	61	243
◇ 対価	37,831	8,177	8,079	54,088
農業用施設	617坪	1,025	—	1,642
◇ 件数	1	1	—	2
◇ 対価	—	54	—	54
報 償 金	93,392円	93,944	133,183	320,519
合 計	1,316,360	553,481	1,262,005	3,131,847

注 兵庫県農地改革史 682-3頁 4捨5入

図表87 農地等売渡し実績

区 別	合 橋 村	高 橋 村	資 母 村	計
農地面積	1,057反	653	1,510	3,219反
◇ 件数	1,235	867	1,152	3,364
◇ 対価	1,123,691円	455,562	1,035,797	2,605,049
宅地坪数	10,120坪	290	10,037	20,547
◇ 件数	135	1	133	269
◇ 対価	61,447	5,922	72,147	139,516
建物棟数	—	—	4	4
◇ 対価	—	—	12,800	12,800
牧野採草地	250反	81	57	397
◇ 件数	109	72	66	247
◇ 対価	37,831	8,178	8,079	54,088
農用施設	—	—	—	1,025
◇ 件数	—	1	—	1
◇ 対価	—	54	—	54
合 計	1,222,963円	459,716	1,128,823	2,811,502

またその売渡し実績をみれば前表のようで、農地は合橋村で約一〇六町歩（一一二万円）高橋村で六五町歩（四五万五千元）資母村で一五一町歩（二〇四万円）を耕作者に売渡し、その他三村合計で、宅地二〇、五四七坪（一四万円）建物四棟（二万三千元）牧野、採草地約四〇町歩（五万四千元）農用施設を加え合計二八一万円を売渡したことになる。

六、戦後農業協同組合の発展

戦後の新農業協同組合は、下からの民主的な「協同組織」として再出発した。昭和二二年末には兵庫県主催の農協設立協議会が開かれ、各村では農林省が作成したリーフレット「農協のイロハ」等を各農家に配布し、まず新農協法の部落研究会を開催し、趣旨の徹底に努めた。

1、資母農協の発足と活動

旧資母では昭和二三年三月設立総会を開き、六月八日設立認可あり、八月一五日の終戦記念日から業務を開始した。ついで二九年九月チューリップ等球根生産協会が発足、三二年一月には椎茸生産組合が結成されている。また三五年五月には農協青壮年部が発足、農協組合員の若いエネルギーを結集して農協運動が推進されるようになったし、九月には農産物の共同集荷場が建設された。

三六年には家畜診療所が設けられ、三七年一月から「資母農協だより」を発行することになり、この年の酒造出稼者等とふるさととの連絡のため、心温まる「出稼ぎだより」特集などが発行されるようになった。

三七年の二月には若牛二〇頭の共同畜舎が完成し、三月にはチューリップ球根乾燥貯蔵所が完成した。これ

は五〇万球の保管能力をもっておりオランダ直輸入種の原因圃の設置と共に、水田裏作の球根栽培が定着するようになった。

昭和三八年五月、養鶏の発展に備え、共同育雛所を設置したし、八月には養蚕協業桑園二ヘクタールを造成した。また一〇月には飼料倉庫が完成した。（「資母農協だより」）

2、高橋農協の発足と活動

旧高橋でも同じく二三年二月設立總會、のち設立認可あり、諸般の手續き終つて実務活動に入った。とくに良牛の産地として歴史と伝統をもつこの地では畜産に意慾をそそぎ、戦後間もない二一年七月につる牛組合を結成したが、当然、新農協の管理指導のもとに将来の発展を期した。

3、合橋農協の発足と第一年度事業報告

旧合橋でも二三年四月発起人会を開き、以来諸手續きを完了し八月三〇日第一回臨時總會を開くに至つた。翌二四年五月の第一年度業務報告の事業概要を宮嶋藤一組合長は次のとおり報告している。

（前略）運営に當つては農業会時代の封建性を一擲して真に愛される農民団体としての活動体制を確立するため、あくまで民主的経営を主眼とし毎月役員会を開催し、冬期には部落座談会を開き、會員の意見を聞いてこれを直ちに運営面に具現する方途を講ずるよう努めた。

指導事業は養蚕を復興さすよう桑苗の植込を極力奨励し、主食については立体的増収を計るよう農青連及び村当局と連絡の上、斯界の権威、近藤正氏を招いて講習会を開いた。また今後の農村恐慌に備へ、立地条件に有利な椎茸栽培を奨励すべく、県下の先駆者、長谷波健吾氏を招いて講習会を開き

合橋村 昭和25年度取藪高6,583貫番付表

西										蒙御免	東									
全	全	全	全	全	前頭	小結	関脇	大関	横綱		全	全	全	全	全	前頭	小結	関脇	大関	横綱
三三、一二〇	三三、九八〇	三三、五四〇	三七、七〇〇	三七、七二〇	三八、四二〇	三九、五二〇	四三、四八〇	四四、八〇〇	五七、一八〇	勿	三三、四八〇	三三、三二〇	三五、三六〇	三七、七二〇	三八、〇〇〇	三九、〇四〇	四〇、一〇〇	四三、八六〇	五三、六二〇	七二、六六〇
日殿	小谷	河本	野尻	河本	唐川	河本	相田	日殿	矢根	行司	市場	矢本	河根	小谷	西谷	相田	市場	唐川	矢根	浮根
小山	小宮	松岡	大石	岡本	永井	坂本	山田	森井	永井	各部落養蚕部長	大石	三宅	岩出	岡本	澤田	安田	山田	大石	中田	浮根
一夫	磯治郎	亀之助	佐吉郎	基弘	義雄	廣志	房治	正義	勝正	勸進元	武志	峯太郎	九右衛門	伊佐次	國雄	順一	憲三	敬次	六郎	儀八
全	全	全	全	全	全	全	全	全	前頭	合橋村農業協同組合	全	全	全	全	全	全	全	全	全	前頭
二九、一八〇	二九、七二〇	二九、八四〇	三〇、〇〇〇	三〇、〇六〇	三〇、三八〇	三〇、七二〇	三一、三〇〇	三一、四四〇	三二、〇四〇	水石	水石	日殿	唐川	唐川	矢根	野尻	小谷	河本	相田	
澤田	澤田	佐々木	市場	河本	河本	西谷	小谷	天谷	河本	岸本	山本	森井	永井	初田	永井	堀江	宮田	土肥	岸下	
貞一	宗隆	謙一	富重	岡重	廣利	千順	澤武	森重	岡重	久太郎	弘良	孝實	牧太郎	網太郎	敏太郎	喜代志	繁三	正次		

昭和二五年春、初、晩秋蠶合計額三〇〇〇〇以上取藪されたものを作成致した。
 桑園反別五七町七反 反収一〇四三〇 掃立牧藪量 春六、〇二〇瓦 五、二八三
 初秋五〇瓦二一〇 晩秋二、〇一〇瓦 一、二七八 合計八、〇八〇瓦 六、二七八

種菌を斡旋した。

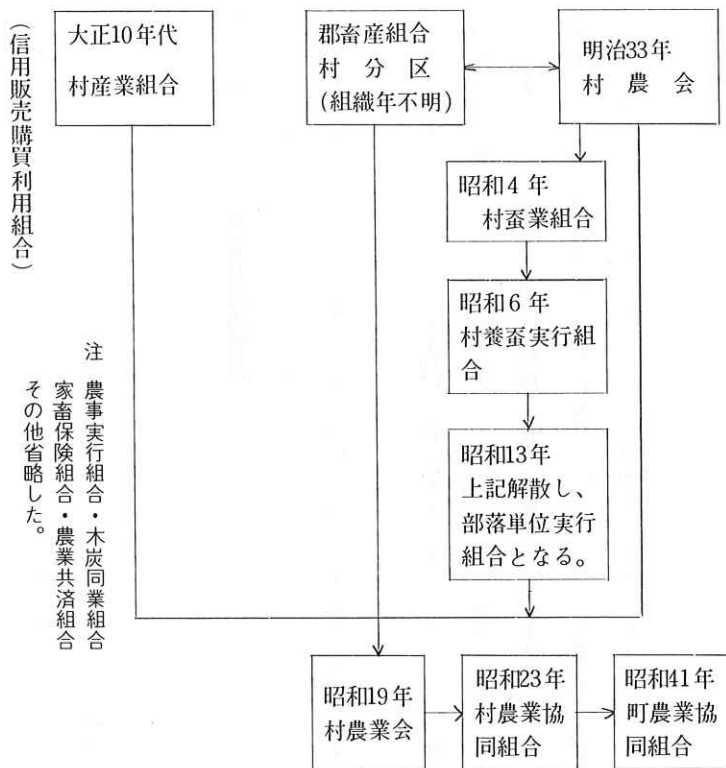
畜産については種牡牛経営安全のため人工授精実施の体制を整備、受胎率の向上、畜主の負担軽減し（中略）今後の運営はとくに役職員の強力なる一致と組合員の熱烈なる支援を得て万全を期したいものである。

と結んでいる。

4、農会——農業会——農協組織の変遷

その後の農協発達史は同時に各村の農業の発展史であった。かくして旧三村各農協とも、敗戦後の食糧増産と供出の重荷に耐えつつ、組合員の経営的地位の向上に主眼をおいて、金融販売購買事業を展開していった。

この項を終るにあたり、明治三三年資母村農会創立以来、およそ八〇年間を大観すれば次表のようである。この系図は完全とはいえないが、旧三村とも年代に多少の前後はあっても時を同じうしてこの組織を作り、その傘下に結集されて生活してきた。村農会時代は農事奨励が主体だったが、農家経済を左右する養蚕畜産木炭の奨励もまたその一環であり、時代の変化に応じ、ときに分離し、改組し、新設があつたが総じてこの系図のように経過し、こんにちに至つたことは既述のとおりである。



昭和5年7月3日郡畜産組合へ提出の
出石郡家畜保険加入状況

村	契約頭数	契約保険金
合 橋	99	14,070 円
高 橋	61	10,240
資 母	139	20,350
計	299	44,660
郡合計	374	58,950